

中部ヨーロッパにおける

年間習俗と聖者崇拜の研究

植田重雄

序 (A)

日本における民俗学の創始者ともいべき柳田国男はかなり早い時代に、ハインリッヒ・ハイネ (Heinrich Heine) の「流刑の神々」(Götter im Exil) の作品を読んでいる。この作品はかつて華々しく歴史の上で活躍したギリシヤ・ローマの神々が、あとからヨーロッパにはいつてきたキリスト教に、きびしく圧迫され、異端の刻印を押されて山間僻地に僅かに生き延びている有様を伝説や歌謡、習俗の中に見出し同情の眼を向けて叙述している。ハイネ自身は自由な詩人、文人としてユダヤ教に執するところはないが、ユダヤ人として彼の詩魂は流刑悲運の神々に一掬の涙を注いだのである。しかし柳田国男はハイネのもつ詩情に流されることなく、ヨーロッパにはキリスト教文化以外にギリシヤ・ローマ文化あり、さらにゲルマン・ケルトの先行宗教がある事実を知ったということ。「不幸なる芸術」の中で述べている。彼はこの作品から民俗学的な問題を掘み出そうとする。むろんこれによつてばかりでなく、英国のフレイザーなどから民俗学の着眼点と研究方法をすでに十分学んでいたのである。もつ

とも柳田がハイネのこの作品を読んだのは、ドイツ語からではなく、英訳からであった。それにしても明治末期（あるいは大正期）にこの方面に着目して、日本の民俗学の研究の歩を進めた旺盛な知識力には注目しなければならぬ。その後日本における民俗資料の集成に専心努力した功績は認めるが、他の文化圏との関連とか相互性の問題、文化形態論に至っていないのは、今後に残された主要研究課題である。

現段階においては、日本における大方の民俗資料は完全とはいえないが、ほぼ集成整理されつつある。また他方ではどの分野の民俗的特色を攻究すべきか、その領域別による研究はまだ未完である。ここで取り上げる中部ヨーロッパは、文化形成の段階で日本との関連においてその形態や精神態度に見るべきもの、相互に刺戟し合うもの、その共通性と異質性を明らかにすることが、広い人類的文化史的視野において必要とされる。それゆえ、ここでの全体としての見通しは、日本（東アジアを含めて）とドイツ（中部ヨーロッパの他の領域をも含めて）の民俗性、さらに思惟と心情の立体的な考察である。そのためには、予測や予見なしで調査や研究をすすめることをまず意図しなければならぬ。第二次大戦で敗北した二国は、再建復興に目ざましいものがあるにもかかわらず、民俗学の分野ではいちぢるしい差がある。日本の場合には戦前の制約化におかれた研究が解放され、自由に調査考察がなされてきたのに比べ、ドイツの民俗学は戦前に比べやや停滞したかに見える。もっともドイツの民俗学の出発自体がひじょうに遅れていたこともあり、ドイツ的ゲルマン的なものを戦争中に強調したために、その反動として意識的に敬遠された面はある。とにかく、現在は政治や民族主義とは全く関係なく純粹に学問的探究として始まったのである。そこには当然、全ヨーロッパ的視野と文化交流の通すじをたどる冷静な思考を働かせねばならぬ。さらに拡大すればオリエントや東アジアとの関連をも比較すべき点が多くなる。もっとも比較の場合はただ何の根拠なく比較すれば、事足りると考えるのは大いなる誤りである。現在、日本の学会の風潮に比較研究をいとも簡単に濫用する

軽薄な人々がいる。学問的根拠なくしていたずらにこれを行うのは、敵に慎しむべきである。

序 (B)

ヨーロッパ諸国がキリスト教国であり、キリスト教文化を形成しているということは、今日自明の前提である。だがその文化の内容を仔細に検討してゆくと、単純にキリスト教一色ではない。たとえばキリスト教自体はヨーロッパで発生した宗教ではなく、パレスチナから地中海を渡って伝道し、ヨーロッパに定着したものである。それゆえキリスト教が伝来する以前、ゲルマン固有の原始信仰と祭儀があった。今日週名や地名に名をとどめているウオーダン(オーディン、Wodan, Odin)とか、フリーア(フライア、Fria Freia)の神々は、古代ゲルマンの神話で主役を演じた神々であり、現在民間習俗で信ぜられているペルヒタ、ホレ等々の魔女はヘクセン(Hexen)の存在として元来ゲルマン人たちの生活習俗の中で位置づけられ表象されてきた精霊たちである。

ガリヤ戦記に見られるように、ローマ帝国の指導者たちは、北の脅威を除くためにドナウ河、ライン河を溯り、ゴール、ゲルマンの地を平定しようとして軍を進めた。ヨーロッパにはいったローマ人たちは、その地にローマの文化を伝搬した。ライン沿岸の葡萄の栽培、新しい農耕技術、牧畜法、医学などをはじめ、都市城塞の築造、道路の整備等々ゲルマン人たちに新しい生活様式や技術を教えた。同時にローマ人たちが信ずるローマ固有の神々を祀る神殿もヨーロッパ各地に建立した。やがてゲルマン人もこれを継承したとおもわれるし、ラテン人とゲルマン人の混血もおこなわれた。しかしローマの衰亡とともにローマ文化はそのままキリスト教に継承される。しかし、同時にローマ(ギリシヤ)固有の宗教は異端として排斥されてゆく。これがハイネのいう、「流刑の神々」となり、ドイツ各地の辺境地にその崇拜の痕跡をとどめることになったのである。その運命はゲルマンの神々も同じであつ

て、森や山地へ追いつめられ、表面上はキリスト教によって否定されて、その崇拜の神殿址すらとどめていない。わずかに民間の伝承、伝説、諺などにその面影を伝え、農民、漁師たちの間に習俗として残る。あるいは森の精、水の精 (Undine)、小人などとして民話やグリムなどの童話の世界に語り伝えられているのである。

このゲルマン人よりも早くあるいは同時にヨーロッパに居住していたと思われるケルト人の遺蹟はさらに遠く幽かである。ケルト人とゲルマン人は敵対者として争ったのではなく、各地で共存していたらしい。ケルト人の痕蹟を濃厚に残しているのは、英国である。英国には巨石遺構、ドルイードの崇拜石などの原始的なものとか、発掘による各種の造型遺物とかさらに各地の地名などに遺っている。しかしケルト文化はケルトの移動とともに、衰退し、わずかに民間の呪術、葉草などに推測するにすぎない。

以上のものを要約するならば、ヨーロッパの文化構造は、キリスト教文化を主軸とするが、その他の要素としてゲルマンの宗教と習俗があり、ギリシヤを含めるローマ文化が融合し、それらの基部にケルト文化あり、のちにはスペイン方面から流入移動してきたユダヤ文化があり、これらは重層をなしてヨーロッパ文化構造を構築しており、かなり複雑に入り組んでいて、けっして単純なものではないのである。

はじめに伝道に従事したキリスト教の司祭、神父、宣教師たちは、ゲルマンやローマの迫害を受けて殉教したことにも相当あつたらしいが、やがて力を得るとともに、逆に先行のゲルマンの信仰を否定してゆくことになる。それは共存という形ではなく、その宗教的聖所を破壊し、異端の宗教として否定拒絶していった。しかし公的には抹殺されたが、ゲルマンの信仰や神話は僻地の村落などに残っていった。換言すれば、公けには存在しないが、ドイツ人の民俗の中には生きつづけた。教父たちも、たんに原始宗教の抹殺ではなく、キリスト教的な形態に名を換えたり、ゲルマン的習俗を摂り入れたりして、むしろ双方の融和をはかったのが実情である。多少の変容かあるいはそのま

まの温存などによって伝えられる民俗行事も少なくなかった。そのために一応表面的には、キリスト教の年間習俗のように見えながら、よく探ってみると、ゲルマンのそれを実際には伝えている場合がかなりあるといつてよい。その間に民俗や伝説も思想的に深まることもあり、また渾然と抒情的あるいは抒事的なものに昇華することもあり得る。元来歌劇や詩歌、音楽、演劇などの芸術的なものに昇華する以前、芸術家たちがその素材として着目したのは、民俗的行事、地方伝説とか民謡、郷土芸能などである。ゲーテの「ファウスト」、ワーグナーの歌劇「タンホイザー」、スメタナの交響曲「モルダバ」その他枚挙にいとまない。従来日本のヨーロッパ研究、ドイツ研究は、ある特定の文学者や思想家の作品の理解と解釈に偏り過ぎた。それは是非とも必要なことであるが、しかしヨーロッパの人々が年間どのような生活を営んでいるかをも知らずに文学や哲学だけを考察することは、いかに原典を忠実に読み、註を下したにしても帰するところ生活や歴史、自然の重みが感ぜられない主観主義に陥ち入る危険性があるとおもわれる。とにかく本稿においてはヨーロッパの年間習俗や祭儀などの基底にあるもの、その成立と意義を考究しようとするものである。

一 冬の習俗と聖者崇拜

一体「冬」という季節をいつから何日と定めるべきか。ゲルマンにおいては、決まっていなかった。今日のわれわれは太陽暦に基づいてすべてを処理しているが、古く溯れば溯るほど月暦（大陰暦）の要素が多くなり、さらに自然暦のように人間体験をつみ重ねたものがある。一般に「冬」(Winter)の語源は古代ガール語のヴァインド(Windo) 白 (Weiß) という意味で、「白い季節」を表わす。冬は寒気、嵐、雪、氷、霜の季節、右手、あるいは両手を口に置いて温める動作で表わしている。サン・ガレンでは十月十六日の日についてつぎのような諺が残っ

ている。

聖ガレン様が雪を降らっしゃる(山)

中世以来宗教的に重要なサン・ガレンは、スイス山の中で雪の訪れが早い。その他地域によってはシモン・ユダの祭の日(十月二十八日)としたり、カール大帝の頃、聖エギディウスの日(九月一日)と定めたりした。これ少早いように思うかも知れないが、古い時代にはゲルマン人は冬と夏の二季のみで一年を考えていたので、冬の始まりは当然秋の始まりと重なり早くなるのである。人間の生活実感から体験される自然暦は、地方によって異っていた。黄葉が北風に吹きまわられて、わずか二、三日の中に舞い散って蕭條とした裸木になる有様は、詩歌にもよく歌われているごとくであり、そのあとを追うように霜が降り、雪が舞う。しかし、気まぐれな天候のために、温かい日がつづいて、冬がおそく到来する年であれば、「聖アンドレアス」(St. Andreas)の祭の日の頃を冬と見るのが適当と思う地方もある。

アンドレアス様の日には間違いなく冬がやって来る⁽²⁾

太陽暦の天文学的な冬の到来は、クリスマスの前、十二月二十一、二十二日であるが、しかしドイツの風土の実感からは、到底信じがたい。十一月にはいると、小雪がちらつき、十二月半ば過ぎからは、完全に雪の世界に閉ざれるから、今更十二月二十一日頃といっても、大抵の人は承服しかねるのである。生活による季節感に重点をおいてゆけば、十一月十一日の聖マルチン祭あたりを冬の開始と見做すのが妥当かもしれない。

聖マルチン様が馬に乗ってやって来ると、雪を降らして下さる⁸⁾

聖者マルチンを祝う頃、大抵初雪が降る。雪の中を馬で歩くマルチンは冬の到来を告げる象徴である。同時にマルチン祭はじつは一年間の生活を締めくくる大切な祭でもあったことを意味している。いわゆる十一月(November)は、ローマの古い暦で三月から始まって九カ月目を意味するローマの月名をそのまま用いている。ドイツの古い呼び名は、「風の月」(Windmonat)、「冬月」(Wintermonat)といひ、十二月と区別するため、「第一の冬月」(Erste Wintermonat)と名付ける。この月を「屠殺の月」(Schlachtmonat)と呼ぶ地方もあるが、一年間飼育して肥えた家畜を屠殺してこれを神々に捧げて感謝を表わし、塩漬けにした貯蔵肉をふるまって、人間も御馳走の喜びを領ち合ひ、来るべき冬の季節の体力づけをする。別に「結婚の月」ともいう。農耕や牧畜などの仕事から解放され、貯えも出来ているので、結婚する風習が古代からある。そのほかの呼名で注目すべきものは、「マルチンの月」(Martensmant)とか「万霊の月」(Allerheiligen Monat)という言い方もある。ここではまず聖者崇拜と結び付いた聖マルチンの祭について考察してみたい。

二 聖マルチン祭の意義

聖者マルチンの呼び名はヨーロッパ各地でじつに多種多様である。その一部を列挙すると、Mart, Mertens, Märtens, Marten, Marten, Marti, Marty, Martino, Nello, Morcin, Weibl, Martina 等々ある。この聖者は子供の守護聖者となったため、子供が親しんでいう呼び名がいろいろ変化してこのように多いのではないかとおもわれる。とにかく彼はヨーロッパにおいて最初にキリスト教の信仰を告白して伝道した聖者である。しかもパレスチナやロ

マーマの聖者とちがって殉教者でないことも大きな特徴である。聖マルチンはまだキリスト教化されないヨーロッパにはじめて修道院を建てたし、すぐれた修道僧、教父として民間の聖者として崇敬をあつめた。とくにメローヴィング王家、フランケン地方の守護聖者でもあった。十一月十一日は本来彼の歿した日であるが、次第にその徳を讃える祝いの祭となり、提燈を点し、教会の広場では大きなかがり火を焚いて祝う。提燈の行列はいわゆる「光の行進」(Lucernarium)で雪の降る市の城門までいって、やさしい愛に満ちた騎士姿の聖者を迎え、町や村の中央広場や古い教会へと提燈を振り、歌いながら案内する。伝説によれば、アミアンの市の城門にさしかかったとき、貧しい乞食が飢えと寒さに震えているのを見るや、騎士マルチンはすぐさま劔を抜いて外套を二つに裂いてその一つを乞食に着せ、所持していたパンをも与えた。この乞食(じつはキリスト)はキリスト教徒たちとのところに現われ、「未だ洗礼をも受けていないマルチンが、わたしにこのようにしてくれた」と彼のやさしい心を賞讃したという伝承が語られている。このような「やさしい愛」の行為が民衆に親しまれ、愛される聖者となり、とくに子供たちにも恵みを与える聖者として崇められるのである。

この祭の日には子供たちは聖者の恵みに預って両親その他親しい間柄の人々に欲しいものをねだったりせがんだりすることが出来る。家族や親戚だけでなく見知らぬ家の前でマルチンの提燈をさげて立つて歌を歌うと、お菓子やパン、果物などを与えられる風習がある。これは聖ニコラウスが子供の聖者となっているのとよき対照である。ラインラント地方、ボンやケルンを中心にしたマルチン祭の行事は、有名であり、サンタクロース以上の意味を現在も持ちつづけている。

マルチン祭に鷲鳥を食べる慣わしについては、すでにふれたように、寒く長い冬を迎えるにあたって、栄養をつけるためであるか、もう一つの理由は、マルチン祭のあと、クリスマスにはいるまでに、詳しくいえば、アドヴェ

ントまでの数週間は昔は断食をしたり、一定の食事のみを摂って精進していたので、それ以前に十分に栄養をとる必要があった。とくに鶯鳥や家鴨はこの季節にはたつぷり餌をとり肥えて美味しくなっていた。これは恰も復活祭にはいる前、「灰の水曜日」(Aschermittwoch)の懺悔と精進にはいる前に、カルネヴァルで大いに御馳走を食べるのと対照的である。鶯鳥がなせマルチン祭に食べられるかといういわれは、聖者が熱心に説教をしていたとき、鶯鳥がガァガァ鳴いて聞えなくなってしまったので、その罰として食べられるのだとか、謙虚なマルチンは、トゥールの司教に人々から推薦されたとき、固辞して鶯鳥小屋へかくれたが、鶯鳥が鳴き騒いだために発見された罰であるとかいわれる。むろん、これは祭のときに話される冗談(Schertz)である。祭のときには、冗談をいい合ったり、面白い話をしたり、ふざけたりすることが半ば公然と許されている。鶯鳥はヨーロッパの農村で沢山飼っていて、不審な者が来ると鳴き騒ぎ、人間の背丈位ある鶯鳥はつついて追い出してしまふから、盗難除けにもなる。兎に角、鶯鳥にとってこのマルチン祭は御難のときである。

しかしマルチン祭の重要性は、この聖者の徳を讃えることだけでなく、この十一月十一日がヨーロッパのキリスト教国では一年のすべての行事の終了を意味している。年間の宗教行事だけでなく、一切の生活の収支決済をおこなない、次の新しいクリスマス(新年)を迎えるのである。これは古代ゲルマンの主神ウォーダンにたいする収獲感謝の祭と大体において一致する祭なのである。原始習俗からキリスト教へとさして不自然なことなく移行することが可能であった。一切の取引、貸借、地代家賃の決済、雇傭の更新もこのマルチン祭を基準にしておこなわれる。年間習俗の終りがそのまま冬の始まりとなるのである。

三 万聖節と万靈節

年間曆の上で特別に祭を行わない多くの殉教聖者たちを祀る「万聖節」(Allerheiligen-fest)がある。十一月一日におこなわれる。大司教ボニファティウス四世が東ローマ皇帝フォカスから贈られた神殿を、聖母とすべての殉教者に奉献したことから始まる。これを記念して教皇グレゴリオ四世が八三五年に十一月一日と定め、ドイツでもルートヴィヒ敬虔王が早くからこれを取り入れた。英国ではこれよりはるか前に十一月一日として取り入れた。ケルト人が年の始めとして祝っていたこの日に当てたのである。十月の終りに蒔く穀物は、万聖者が畑を祝福してくれるのでよく実るとブルターニュ地方ではいい慣わししている。オルデンプルク地方では、これと反対にこの祭の頃に畑を耕したり、種子を蒔いてはならぬといひ伝える。一般にドイツではこの日を夏の終りとし、冬の始まりと見做す。この日の具合によって、来るべき冬季はどんな状態か分るといふ。一對の豆を火に投げ入れ、そのままよく燃えれば、若い男女は幸福になり、弾けて飛んだりすると不幸になるといふ占い事をする。これにたいし万靈節(Allerseelen-fest)の方はクリュニーのオディロ(Odilo)によって九九八年、ベネディクト派修道院においてこの世に生を享けて死んでいったすべての者を祀る祭として、万聖節の一日あとの十一月二日と定めた。一〇〇六年教皇ヨハン十九世は全カトリックがこの祭を行うよう勅令を出した。しかし民間信仰や習俗の上からいうと、死者の魂がこの祭の頃に帰って来るのを祀るためである。バイエルン、オーストリアでは十月三十日から十一月二日まで死者は生前住んでいた家を訪ねてくるという。この前後一週間小さな燭火をともし、彼らが無事帰れるようにする。万靈節の日に墓地へ赴いて墓をきよめ、花などを飾る。煉獄の火で魂が苦しまぬよう墓には清めた水を注ぎパン、ワイン、豆など死者へ食物を供える。さらに臘燭、とくに色ガラスで作った小さなランプをたずさえて

墓前に点す。ただし自殺者の墓には光も点さない。もし点せば、その子孫も自殺するようになるからである。墓に点された光は死者たちを悪霊から守るともいわれている。またこの光は死者と生者の間にその区別をつけて置いためだともいわれている。

家の中に死者たちが帰ってきて、安らかにしていられるようにテーブルの上には生前好んだ食物や飲物（ミルク、パン屑など）を供えて置く。煉獄の火傷を癒してやるためには、脂肪を小さな容器に入れ、魂が涼しく感ずるように冷やした牛乳を用意する。何もはいつていないフライパンを火の上に置いたり、ストーブの火掻き棒を逆さにしてストーブのところに置いてはならない。またものを切るナイフをテーブルに置いてはならぬ。ドアや窓の閉に音のせぬように注意しなければならぬ。このようなことは死者の魂に苦しみを与えるからである。かまどの火は燃しつづけ、けっして絶やしてはならぬ、遠い旅をして死者は冷え切っているので暖める必要がある。部屋には臘燭の火を点して死者の魂の安らぎを祈る。この火の光は永遠の光へ導く助けともなる。

死者の霊は光となって、墓を訪れ、あるいは鳥になって飛び、教会の庭の草の茎あるいは畑や道端に坐っていることがある。アルプス地方では墓地や教会でひきがえるを見たら、これは死者の霊であるから、いぢめたり、傷つけたりしてはならないという。霊たちが風のように大気を通して歩んだり、白い霧となって見えるのは、特別な恵みを得た人間のみ可能だといわれている。しかし真夜中頃に死者の霊が歌っているのをきくこともある。また部屋の中や教会の地面の下でぎしぎしいたり、呻いたりする声もきこえてくるという。やがて死者たちは死の国へ帰ってゆく。ある地方では牧草地や畑に馬を放っておくと、それに乗って帰るともいう。この万霊節の頃、ゲルマンの狩猟の神ヴォーダンは嵐のごとく天空を駆り、かつて海に沈んだ町の財宝が浮び上り、沈鐘がきこえてくる。裁判は一切中止し、殺物は蒔いてはならず、鹿狩なども一切禁ぜられる。

万靈節には、物故した近親者を偲び、かなり年月を距てた死者への回想にふける。ここには原始ゲルマンの死者の靈の祀り、古代ローマの死者の祭の要素も多く残っており、靈へのおそれや慰めもあり、さまざまのもてなし方、迎え方、送り方があり、想像力を加え、心情をこめていることがよくうかがわれ、それにとまなう多くの禁忌も時代、各地域ごとに生れていったと思われる。この死者への民間信仰や儀礼については、またのちに「十二夜」、「燃し夜」で触れるが、ヨーロッパでは夏、冬二回死者が帰ってくると民間信仰で考えられており、とくに冬帰ってくるという意識が濃厚である。

四 待 降 節

一年間の生活を締めくくる聖マルチン祭が終り、つぎに待降節を迎える。現在の待降節 (Advent-fest) は十一月二十六日後の日曜の聖日を以て第一の待降節とする。この待降節は二つの根拠をもっている。一つは四三一年エペソスの宗教会議において決定付けられた受肉説や神学に基づいてクリスマス前の一週間をクリスマスの準備期間とする考え方で、やがてローマではマリア受胎と聖子受肉説から十二月の三週間が待降節となる。これにたいしてガリヤ地域ではフランク・ケルト・ラテン諸文化の融合のプロセス(その代表はメロヴィンガ王朝、ゲルマンのニールンゲンの歌の形成)に際してキリスト教僧侶たちは、終末論的な思想や世界の審判を強調した。このガリヤ地方の待降節は世界の審判と福音、さらに数多くのキリスト再臨に関する独特な考え方をもっている。その象徴的な造型はラヴェンナの聖アポリナレ教会の九天井のアプシスモザイクでつくられた全天に輝く星の前に大きくくつきりと巨きな十字が浮び出ている。これは終末に再臨するキリストの象徴である。この終末に再臨するキリストとキリストの受胎告知、その誕生とは密接に結び付いていることはいうまでもない。昔はマルチン祭に始まり、ク

クリスマスまで三週間の断食をおこなった。一〇二二年、キリスト誕生の祭（クリスマス）まで十四日間信仰深い者は断食すべきであると定められており、待降節から公頭節までは結婚も禁ぜられている。待降節の第一週の日曜日から教会暦の新年がはじまるとしているのは、カトリックもプロテスタントも同じである。

待降節の花環 (Adventkranz) がこの祭の間教会や家庭で飾られる。夏を象徴する白樺、冬を表わす樅の木、この二つの枝を組み合せ、クランツを作る。その中に四本の臘燭を点す。これは週ごとに一本づつ点してゆく。大聖堂や修道院教会では十五本ともすところもある。これは讚美歌の数、九つのマトウティン (Matutin)、五曲のラウダ (Lauda)、これにベネデクトスのカンティクムを加えて十五曲に合せたものである。

待降節ははじめに懺悔や断食、精進がおこなわれる。婦人、若い娘たちも黒の衣服をつけて教会にゆく、教会でも祭壇やカンツェルに黒いものを飾る。しかし二週、三週となるにつれて次第に黒から転じて柔らかい色彩を着け、クリスマスに近付くにつれて、明るい喜びの衣裳とする。このように信仰と習俗は二重の表情を持っている。この待降節にあたり、キリスト誕生を祝い、抹桶を飾り、村の若者たちは角笛や笛でクリスマスの歌を吹く。このような習俗は、暗く寒い季節、悪い霊を追い払うことから来たもので、これを「野の声」(Feldgeschrei)と呼んでいる。この待降節の頃からさまざまの霊が跳梁する。サバトの日に魔女が現われるので煙を燻して追い払う。樹木娘 (Holzfräulein) や黒男が閃めく玉、火の塊りを通りかかる村人に投げつける。森の中でヒュイマン (Hümann) が呼びかける。ヨーボルトがいろいろな姿をとって狩人を迷わせる。アドヴェントの豚、犬などがうろつき廻り、大気の中から祈る声や音楽がきこえてくるが、これらはみな魔女や精霊たちの惑わしである。これを制圧するためには特別に聖者や信仰の力による祓いの行事が必要である。

五 聖アンドレアス祭

待降節は十一月三十日の聖アンドレアス祭の夜から始まると見做している地方が多い。聖アンドレアス(St. Andreas)は聖書によれば、ガリラヤ湖畔のカペルナウムの漁師でペテロの弟である。キリストの福音を宣べ伝え、ギリシヤのパトラスで殉教を遂げたと伝えられている。カトリックの漁業関係者、英国では彼を守護聖者にしてゐる。ところでこの聖者は一般の民間信仰では結婚する者の守護聖者という役割を果している。現代の自由恋愛とちがい、自己の運命のヴェールの彼方を見ることのなかつた昔は、とくに女性は愛の相手を知るための占い役を守護聖者に願つたのである。すでに三百年前に詩人フリードリッヒ・フォン ロガウ(Friedrich von Logau)はつぎのように歌っている。

聖アンドレアスの祭がやって来ると、

妻をもとめる若者も

夫を迎えようとする娘も

熱烈な祈りする慣わしである。⁽⁴⁾

このような熱烈な祈りはつぎの「アンドレアスの歌」にうかがわれる。若い娘はこの歌を歌いながら、うしろ向きのまま、ベットにたおれて占う。その時、未来の相手の面影が浮ぶという。

親愛なる聖なる

アンドレアス聖者さま、

わたしの心から愛するいとしい方を

わたしの力の中に、わたしの姿の中に

彼がどのような具合であるのか、

どんな方であるのか、お教え下さい！

彼がどのように祭壇の前で誓いを立てるか、

ビールやワインを飲むときの様子をお教え下さい。

わたしはその方と一しょで幸福でありたい、

水やパンの食事のときの様子も示して下さい、

わたしは彼と一しょに苦しみをともしたいのです。⁵

六 十二月の意義

十一月の下旬頃から、毎日雪が降りつづき、十二月の待降節にはいれば、冬は間違いない。十二月(Dezember)とは本来古代ローマの暦で十番目の月という名であり、昔は十二カ月でなく、十カ月で一年が終り、現在の三月が新年の始まりであった。最も古いドイツの呼び名は Heiligmånoth (聖なる月) といひ、のちに「キリストの月」(Christen Monat) にきたる。これとならば「冬の月」(Wintermonat) は、十一月その他の月と区別しての呼び名である。「狼の月」(Wolfsmonat) 「厳しき月」(Hartmonat) も同じく、あざむきに狼がうちつき、人間を襲うおそろし季節でもあった。すべにふれたように「待降節の月」(Adventmonat)、「マンデンマスの月」(Andreas-

monat)とも呼ぶ。とにかくキリストの誕生を祝う大きな祭の月であり、同時にゲルマンの冬至の祭の遺習など年間習俗の上で重要な月である。十二月の諺がある。

十二月は雪と寒さをもたらすが、それに応じて穀物をも与える。⁶⁾

七 聖ニコラウス祭

聖ニコラスは、小アジアのミュラ (Myra) という町の司教で、ニーカシアの宗教会議の重要なメンバーの一人であった。東方教会 (ギリシヤ正教) でまず崇拜された聖者である。ヨーロッパではオットー二世の後テオファヌウ (Theophanu) が九七三年頃この聖者崇拜の習俗をもたらしたと伝えられる。はじめは教会の共同の守護聖者として一〇〇〇年頃にアーヘンのブルトシャイドの修道院に祀られ、一〇二四年頃、ケルン郊外のブラウヴァイラーにニコラウス教会が建てられている。一〇八七年サラセンとの戦いの中で聖ニコラウスの骨は無事バリへ持ち運ばれた。この頃からギリシヤ正教に聖ニコラウス伝説が培われ、民間の崇拜がさかんになる。まず第一にこの聖者は学生、生徒の守護聖者であった。彼は学生を死から目覚めたという伝説がある。この聖者の祭は十二月五日か六日かになっているが、もっとも古い習俗ではクリスマススの終ったあとの十二月二十八日であった。学生の中から聖者になる者 (あるいは修道院長、首席司祭) が選ばれた。のちには少年が変装してその役を演じ、子供の祭となり、ドイツでは「子供の司教の演劇」(Kinderbischofspiel) も催される。

ミュラの町に善良で睦じい三人の姉妹がいた。良縁があったが貧しいために結婚の仕度が出来ず、あきらめようと思ひ悩んでいると、聖ニコラウスが事情をきいて気の毒に思ひ姉妹が寝ているときに、こっそり窓から支度金の

はいつた財布を投げ込んで帰った。そのお蔭で姉嬢は目出度く結婚出来、幸福な人生を送るようになった。次の娘もまた末娘のときもそうであったので、最後にはこのようなことをする人はだれなのか確かめるべく、財布を投げ込むぬしのあとを追いつけ、司教のニコラウスであることを知り、神の恵みとして三人は心から感謝した。この噂はミュラの町に広く知れわたった。このニコラウスの慈善の行為は、学生を死から目覚させた行為とともに、聖者にたいする学生の感謝と模範の祭となった。むろん聖者の歿後、その徳を偲んで、はじめ修道院で若い修道僧たちが、後世附属の大学の学生、次第に生徒、児童が劇として演ずるようになる。善行は人に知られずに行うべきであるという信仰がここにある。たれかが聖ニコラウスに変装して、彼の祭の日々に人々に施しをする。これが漸次一般化して愛の施しを行う聖者と見做され、やがて子供に恵みを与える守護聖者となる。

ところが中部ヨーロッパに聖ニコラウス崇拜がはいつて来ると、これに別の要素が加わった。聖ニコラウスは子供の家を訪ねるとき、お伴のルブレヒトを連れてゆき、地方によってはそのほかにクラムプス (Krampus)、ハンムフ (Hans Muff) が加わる。これらのお供は一年間子供たちが親のいい付けをよく守ったか、悪いことをしたか、スープをよく飲んだか、寝る前にお祈りをしたかどうかをたずね、しなかった者にはこれからはよく守るようになんじ、最後に子供の喜ぶお菓子、果物、文房具、おもちゃなどを与える。聖ニコラウスは今日では恵み深い聖者となっているが、以前にはおそろしい存在であり、同時に待ちどおしい聖者であった。昔のニコラウスの形態は、なまはげのように懼い存在であり、バイエルン地方ではニコラウス夫人(あるいはペルヒタ)まで登場して、どすどすと雪の夜更けに家々を歩きまわって、子供たちの肝を冷やすのである。このニコラウスの祭の夜、大体三、四歳から七、八歳位までの子供のいる家をあらかじめ両親の申出によって予定し、大きなプレゼントの袋をお供のルブレヒトに背負わせて、家毎に訪問し、幼児などのしつたいたずらや悪いこと、躰けなどについてメモ帳を持ち、叱つ

たり、さとしたりしたのちに、プレゼントを与え、やがて近付くクリスマスの祝福を行うのであって、ただ子供の欲しがるおもちゃを無暗みに与えるのではない。

一五三五年宗教改革後、聖ニコラウスからの子供への贈物の習俗はなくなり、聖なるキリストが贈り主となり、幼児キリストの祝いとクリスマスのプレゼントが結び付き、聖ニコラウスは子供たちにキリストからの贈物を運ぶたんなる運搬人となる。これはプロテスタントにおける変化であり、赤い帽子、赤いマント・長靴をはいた白い髻の好々爺のサンタクロースはその所産であり、この呼名はオランダ方面から拡がり、北米大陸からヨーロッパへ逆輸入されていったものである。聖ニコラウスと従者ルプレヒトは「クリスマス爺さん」(Weihnachtsmann)ともいわれる。しかし北のスウェーデンにゆくとこのクリスマス爺さんも「ユルトムテ」(Julmote)といて一種の民間信仰の奇怪な存在、精霊と考えられるようになる。しかしスウェーデンの「ユルクラップ」(Julklapp)の習俗は、クリスマスの晩に主に行われるのであるが、聖ニコラウスがたれにも知れぬように人を喜ばせる贈物を送るといふ行為を受けついでいるといつてよい。クリスマスの晩、贈物を「ユルクラップ」といって窓から投げ込むのである。しかし今日では親しい友達、恋人、婚約者へこっそりプレゼントする習俗になりつつある。キリスト教の徳高き聖者が子供の守護聖者になるとともに、その従者にゲルマン人にとって昔から身近かな自然の精霊や神性をかならず添えるという風に変化適応してゆくことも注目すべき現象といつてよいかもしれない(本論稿においては、聖バルバラ、聖トマスの祭、すなわちクリスマス前の習俗についてはかつて触れたところであり、クリスマスだけで優に本論稿の枚数を越える内容となるので別個に論述することとし、ここではゲルマン古習俗に関係深いものだけを取り上げることにする)。

八 十二夜（燻し夜）

十二夜 (Zwölfachte) は、クリスマスとともにやってくると考えられている。一般的には十二月二十五日から一月六日までをいう。太陽年の三六六日と古い太陰年 (月曆) の三五四日を差引くと十二夜 (日) があり、日時の調整としてこの十二夜が生れたという説が伝わっている。したがってこの十二夜はどちらにも属さぬ日ということになる。しかしこれらの日は一律に決っていたわけではなく、クリスマスの前であるとか、後であるとか、あるいは一月の半ば頃とか地方により時代によりまちまちである。バイエルン地方、オーストリア地方ではクリスマスより三王礼拝の間とし、シュレジャ地方ではクリスマスになる前の十二日間を当て、フランケン地方やメクレンブルク地方では、新年を迎えるのちの寒さのきびしい頃を十二夜としていた。このように異っているのは、元来キリスト教が宣教される前からおこなわれていたゲルマンの古い信仰習俗の名残りがさまざまの形態となって残ったからである。十二夜よりもまず「燻し夜」(Rauchnächte) から考察してゆくことにする。

カトリック教徒の家庭では、草や薪を燻して潔めることをよく行うが、乳香没薬を焚くのもその一つである。これらは昔は高価なものゆえ、庶民の間では普通の薪や石炭、あるいは山野で採集できるヨモギなどの薬草をいぶすことが多い。とくに大きな祭にはその前の晩 (土曜日) におこなう。もちろん、燻すだけでなく家の中を大掃除する。この燻夜は「きよめ夜」(Feinächte)、「黒く煤けた夜」(Schwarznächte)とも呼ぶ。聖トマス、聖ニコラウ祭、クリスマス、三王礼拝祭、謝肉祭、ヴァルプルギス祭、フーベルタス祭、聖ルブレヒト祭等がカトリックの潔めの祭となっている。ウンターオーストリアでは十二月十三日「ルーツィアの祭」(Luziennacht)の夜にその年の復活祭の土曜日に燃した薪や石炭を家の主婦が燻す。これを「ユダの石炭」(Judenkohle)とか、薪とか呼ん

でいる。この間中、家中の何人も通気孔や窓を開けてはならぬことになっている。一般に燠夜の夕方には、司祭、家主、家婦は家のすべての部屋をヨモギその他の薬草や乳香没薬で燠す。家畜小屋、大小屋なども同じように燠し、聖水をふりかけて潔め、魔女、悪霊を追い出す祈りが唱えられる。地方によつては十二月二十一日の聖トマス祭、クリスマス、大晦日、三王礼拝祭の前の晩に燠しをおこなうことに定めているところもある。ピンツガウ (Pintsgau) 附近ではクリスマス前の第三木曜日に若者たちはペルヒタ (Perchia) や魔女に変装して騒ぎ、それを燠して追い出すという行事をおこなう。

この季節に暴れ廻り騒ぎ歩くのは、ペルヒタだけではない。この十二夜の頃には、雪や嵐が吹き荒れ、全ヨーロッパに妖怪が跳梁跋扈する時期である。これはゲルマンの民間信仰に基いていわれていることであるが、雪嵐、風の吹き荒れる夜主神ヴォーダン (Wodan)、あるいは魔王は眷属の魔の狩人 (Wildjagd) たちをひきつれて大空を駆け、不気味な音を立てるので戸や窓は固く閉めなければならない。魔群が家に飛び込んでくるからである。この魔王の軍勢には首のない騎士、あるいは首を持って駆ける白馬の騎士、鼻の曲ったペルヒタ、ホレ婆さんなどの魔女、牙をむいた毛むくじゃらの怪物、痩せ細った蜘蛛のような足の長い精霊、鴉や豚、熊や狼、野ねずみ、もぐら、梟、コウノトリ、蛇、むかで、さんしょう魚、蝙蝠などが押し寄せてわめき散らして通ってゆく。悪業を重ねた末、ついに狼と化した「人狼」(Werwolfe) も暴れ、真物の狼十二匹もあらわれる。恐ろしい魔群ではあるが、この十二夜の頃に、暴れてくれればくれるほど、春になってからものがよく実り、豊作であるといつて喜ぶ地方もある。恐るべき魔群や精霊たちにたいし人間はただじっとしているだけではなく、対抗してさらに恐ろしい奇怪な仮面や服装をつけて若者たちが叫び声をあげて騒いで町の通りを歩いてゆく。美味しい御馳走でもてなしてくれるように家々に押し入る習俗がある。この仮面は春のファスナハトに似ているものが多い。この習俗は本来人間

に害を及ぼす魔女や精霊を制圧し、駆逐するためであった。この仮面、仮装した若者たちは、嵐のように畑を踊ったり駆けたりする。それは畑に地力をつけ、豊饒にすると信ぜられた。また同じ魔女や精霊でも人間にとって味方する良き存在もいる。良き精霊が悪い精霊を制圧するための行事をおこなう。白馬の騎士や白布で顔をかくした精霊の霊若者が家にはいつて来て、踊ったり暴れたりしたあと、魔女のホレ婆さんやベルヒタなどの仮面をつけた魔群を追い出し、追い散らすこともやる。

ゲルマンの信仰によれば、冬と夏の二季に死者の霊や祖先の霊が生れ故郷の家に帰って来るといい伝え、とくにこの十二夜のおこなわれる冬至の頃に家を訪れると考えた。これはやはり子孫に豊饒と恵みをもたらすものと考え、これを大切にもてなすように努める行事でもある。火を焚き、臘燭をともし、故人の生前好きであった飲みもの、食べものをととのえる。この死者の霊、祖霊は家族が迎えるのではなく、霊たちの方から訪れるのであり、その家の守護霊ともなる存在である。ゲルマンの習俗には、この死者の霊の送迎の信仰が、はじめ冬と夏の二季にあったのであるが、時代が下るにつれなぜか冬の方が重んぜられ、そこへ行事が移っていったと思われる。これらについては、次の「新年、年のはじめ」でも詳しくふれるのでここでは省略する。ただし今日広く知られている習俗がイン河地方（ドナウの支流）の山間部に残っていて、白布で顔をおおい、白衣に身を包んだ死者に仮装した村の若者たちが、どここの家にも遠慮会釈なくはいつて来て、テーブルに供えてあるワインやすぐり酒を飲み、御馳走を食べ、もてなす人々がアコーディオンやヴァイオリンを弾いて歌い、仮装の若者たちもこれに合せて踊り、また元のように威儀を正して出てゆき、雪深い家を一軒一軒訪ねるのである。これはいうまでもなく、死者や祖先の霊の訪問を目に見えるように習俗化した行事の名残りであり、これによって霊たちの祝福と加護を祈るのである。

ベーメン地方ではクリスマス前の十二日間にひどく激しい風が吹くのでこれを「風の花嫁」(Windbraut)と呼

んでいる。こういう呼び名もデーモンをおそれ敬まってなだめようとするためである。土地の人々は好ましからぬこの花嫁を追い払うために、燃えているストーブに林檎やくるみを投げ込んだり、鞭をびしびし鳴らしたりする。ペルヒタ、ホレ以外に地方毎にさまざまな名で呼ばれる魔女が、この時期にはあちこちを歩きまわり、しわだらけの醜い婆さんになったり、鳥のように飛んだり、長い鼻の怪物に化けたりして糸を紡ぐ女たちをねらう。この時期には亜麻を紡いだり、破ったりしてはならぬ。奇妙な動物を見かけたら、信用してはならぬ。とんでもないところへ連れてゆかれたり、気がふれたりさせられる。この頃のネズミやカエルなどはみな魔女の化けたもので、これを防ぐには手に三つ十字の印を書き付けて置かなければならない。このように大自然の冬の威嚇と危険を防ぎ鎮める方法が考えられている。本来十二夜は静寂と沈黙の慎しみの時期である。家の内外を掃ききよめたのち、家の者はみな挙作動作すべて静かにしなければならない。咳が出たら、砥石のところへいつてせよともいい、幼児が寝つかれぬときは、母親の腹のところへかくすようにして眠らせなければならぬ。さもないと魔群にすぎを与えることになる。部屋で薬草などを燻したのちには、魔除けの蹄鉄や十字架を部屋ごとに打ちつけ、さらに小弓で矢を射たり、鞭をならして魔女を退散させる。この十二夜の頃、掃除して出た塵埃、芥などを家の門の前に放り出したままにしてはならぬ。家畜小屋も同じく家畜の糞尿を外に出したままにしてはならぬ。朝早くから口笛を吹いてはならぬ。高声で歌など歌ってはならぬ。もし定められた禁忌を守らぬ場合は、カエル、ガマ、ネズミ、モグラ、悪い蟲などが家にはいり込み、きのこが生えて不幸がやってくるという伝える。シュレジャ地方の水車小屋の主人は、「水の精霊」(Wassergeister)や水死者のために川へ食物を投げて慰め、ヘクセンたちが悪戯をしないようにと燃え木を井戸の中へ投げ込む。

このような慎しきは宗教の基礎的態度で宗教の語義は聖なるものから分離した人間が、再び結合すること、聖な

るものを回復する意味だと一般にいわれているが、他方ギリシャ語には聖なるものたいたし「慎しみ」(religio) おそれる意味があることを想起させる。むろん十二夜(燻し夜)はおそれや戦慄ばかりでなく、祝福もある。靴を馬車馬からはずしてこの時期に日光に当ててやると、翌年馬も元気でよく車をひくといわれ、果物のなる木や果樹園はこの頃の激しい嵐で枝を打ち合うと沢山実るといってよろこぶ。さきに亜麻などを紡いではならぬといったが、反対にこの時期に紡いだ亜麻はひじょうに丈夫であり、魔女などの誘惑から人間を守ってくれるともいう。よき精霊の一つに「火の精」(Feuermännchen)がこの冬の夜には現われ、互いに闘ったり、踊ったりして部屋を暖めてくれる。この時期には家の守護霊の小人が現われるので、よくもてなすと祝福を受けるともいう。コッペリアの作品に「火の踊り」という舞曲があるが、このような曲の発想は音楽家の着想というより、長い間の民間習俗の中で培われた火への観想に基くものである。

九 冬至の習俗

なぜ燻し夜、十二夜が各地によってまちまちであるかという点、キリスト誕生の祭のクリスマスが太陽の再生する冬至の祭の日に行うようになったことが原因であると考えられる。冬至はいうまでもなく、一年間で日が一番短かい日で、夏の夏至が一番長いのと対照的である。最短のこの日を極点として、それ以後は目には見えないが、日は延びてゆくことになる。真冬スカンデナヴィアの国を訪れた人ならば実感されるであろうが、太陽が出てくるのはようやく十時頃であり、三時頃にはもう日が沈んでしまう。しかも連日雪が降りつづきこの世界から太陽が消滅したような暗さである。北欧神話によれば、悪い狼(悪魔)が太陽を食べつくさうとしているからである。しかし食べつくしたと思った途端、新しい生命と光をもつ太陽が生れ出てくる。真冬の暗くて寒いさ中ではあるが、ノ

ルマン人やゲルマン人にとって冬至の祭は重要な祭となるのである。しかしエジプト、シリヤ、ギリシヤ、ローマにおいても「無敵の太陽」(Sol Invictus)は、この冬至の極点でよみがえり、新しい力を得ると考える。力とは古代では霊の力である。イランのミトラス信仰も同じですべて太陽神の信仰では、太陽の誕生、乃至は再生を祝う最大の祭はこの冬至である。これを以て一年の開始と見るところも多い。この十二月二十五日の太陽神誕生の冬至の日に信仰の太陽であるキリストの誕生と一致させたのは、ほぼ四世紀頃である。それ以前はキリストの誕生日は、公顯節 (Epiphania) である。すなわち、キリストがヨルダン川でバプテスマのヨハネから洗礼を受け、聖書によれば鳩のごとく聖霊が下ったときをもってキリストの精神的誕生として祝った。このことは宗教的意味からいって十分納得のゆくことである。この洗礼の日は、一月六日であり、今日でもアルプス山地その他でも農民暦は、一月六日を年の開始の日 (新年) としているところがある。ヨルダン川のキリストの洗礼をもって宗教的誕生としているが、十二月二十五日をキリストの誕生の日として定めるようになった。三三五年頃、ローマの司教たちは一年の開始、新年の始めとしたことが明らかになる。やがて太陽暦の採用とともに二十五日から一月三日までを新年の祭をも含めてのクリスマススの祝いとなった。これで冬至と新年の食い違いの問題も解決された。太陽神崇拜がさかんであったローマ帝国の圏内において、キリストを太陽神と同一視することによって、太陽崇拜の異教徒の包摂が迅速におこなわれたのである。この同一性の提起は、等価性ではなく、包摂を意味する。これが歴史が示す論理である。

キリスト誕生の祭がゲルマンの古い冬至の祭と一致させたので古くからある悪魔精霊を追い出したり、潔めたりする古い習俗が前後に分断され、クリスマス前におこなって新しい気分でクリスマスを迎えるとか、クリスマス以後に改めて残されるという状態になったのではないかと思われる。

十 ヤヌスの月

一月 (Januar) は、ローマのヤヌス (Janus) の神にもとづいて、ヌマ・ポンピリウス (Numa Pompilius) が一年の冒頭の月と定めた。ローマの古い暦では「マルスの月」(Mars) と呼ぶ現在の「三月」(Mars, March) が当時の一月 (正月) である。ゲルマンにおいては、十二月同様この月も冬月 (Wintermonat) ブレスラウ暦では「狼月」(Wolfmonat) といい、「敵しい月」(Hartmonat) ともいう。これはむしろ「敵しい寒さの月」(harte kaltemonat) の意味である。スカンディナヴィヤ地方では「トウールの月」(Thornanad) といい、「トウールの神が再誕する月」という意味で、この名も原始ゲルマンの面影を伝えている呼名である。古代ローマではヤヌスの月になると鹿、牛その他の皮をかむり、道化、仮装の踊りがおこなわれた。これは恰も中部ヨーロッパのカーニヴァル (ファスナット) の祭に近似している。これは時の政府が禁止したものである。

一月には星が多くなり、

鶏がよく卵を産むようになり、

日足が延び、

冬は去ってゆく。⁵⁾

「年」(Jar, jer, Jahr, Year) についての根本観念は、春の再来から発展したもので現今の太陽年をはじめゲルマン人は知らなかった。しかしのちにメソポタミヤの影響を受けて、ヨーロッパでも撰り入れるようになるが、現

実には月曆をも併用しており、キリスト教曆はこれら双方を調和させるように務めてきた。どこの文化圏でもきれいに割り切れる曆はない。

いつたい年の開始点をいつから定めるかは、諸民族、諸文化によってまちまちである。プレイアデス星団が空に現われるとともに新年とするのはセム、ハム民族であり、バビロニアの天文学は春が新年と定めているが、ユダヤ教、イスラームなどでは秋が新年のはじまりである。すでにのべたケルト人は十月一日を新年としていた。歴史時代になってゲルマン人たちは、十月十四日頃、さらに十一月十一日のマルチン祭を以て冬とし、同時にこれを新年としたこともある。キリスト教でははじめキリスト洗礼の日の一月六日を新年としていた。アルプス地方の農民曆の中には現在でも一月六日を新年として生活しているところがある。太陽神の誕生を祝い、イランのミトラス信仰では十二月二十五日の冬至の祭があること、四世紀にはキリスト誕生日が十二月二十五日となったことは、すでにふれたごとくである。しかし新年をアドヴェントスとしたり、クリスマスとしたり動揺が絶えなかった。ユリアノス曆において一月一日が新年の始まりと決定され、クリスマスはその一週間前に祝うことになる。さらに一六九一年教皇イノセント十二世が年の新旧交代を一月一日と確定して今日に至っている。したがってカール大帝の治世の頃は、ローマの曆とキリスト教とか混り合い、三月二五日を新年の始まりとしていた。これはマリアの受胎告知をもってこの世界の救いの始まりと解した時期もあったからである。

さて、クリスマスと別個に新年開始の一月一日に特別な祝いの行事をおこなうところは、まだ多い。下部オーストリア地方のマンク (Mank) では、この大晦日の夜、火を消して暗闇にしておき、十二時になるとともに火や明りをともし、教会は一斉に鐘を鳴らしてその年の豊饒を祈る。イーゼルゲベルゲ (Iselgeringe) では、新年になると三〇分間、家毎に窓や扉をすべて閉め、裏の戸口だけを開けてそこから祝福がはいってくるようにするとい

う。アンナベルク (Annaberg) では大晦日の鐘が鳴りはじめると、家族は集って大きな一つのグラスを飲み合い、最後に窓に投げつけてこなごなに砕き靴で踏みつぶしてしまう。教会の鐘が明るくはっきり聞えればその年は幸福が多いといい、その反対の場合は不幸や災いがあるのではないかと心配する。これは洋の東西を問わず行われる予兆・予祝の一形態である。さらに新年がもつ重要な行事は、死者が帰ってくるということである。一年の最後大晦日にエルツゲビルゲ (Erzgebirge) の住民たちは、帰ってくる死者たちのために食事をテーブルに供え、席を設けておく。故人の生前の好物をわざわざ作っておく。エンメンタール (Emmental) では、家の守護霊となつてもうために死者たちのナイフ、フォークをきちんと揃え、昔のままの型のパンを焼いてならべる。東プロイセンでは、死者が身体を暖めるように、ストーブの火をたくさん焚いておく。その側に椅子を置いておき、翌朝新年になつてよく見ると、灰の中に訪れた足跡があるという。生前故人が可愛がった馬を見に訪れるので、とくにその馬や馬小屋を綺麗にしておく。

だがこのような死者や祖霊の訪問とは別に大晦日の夜から新年にかけてさまざまの精霊、デーモンたちが跳梁をほしのままにし、原始ゲルマンの風の神ウォーダンが軍勢をひきつれて天空を疾駆し、狩猟することはすでにふれたごとくである。こういった表象と行事は地方によっていろいろ異なる。東フリースラント地方ではこれを王ラボリウス (Robolius, Radbod) が冥界からやって来るといい、ヴィスマール (Wisnar) の修道院教会ではここに埋葬された大公妃が黄金の馬車で現われるといい伝えている。この夜は冥界にいる者たちの仕事をしている音がきこえてくる。また海底に沈んだ鐘の音がきこえ、吸血鬼型の「ムロ」(Mulo) の悪霊が女性を掠奪にやって来るので、シプシーの女たちは天幕の入口に毒性のつよいチョウセンアサガオ (Stechapfel) の実をしいて置く。この夜魔、女 (Hexe) が十字路にひそんでいて、通行人、旅人に襲いかかる。家長は家族が家の外を歩くときは、臘燭をともし

て魔女を近付けぬようにし、家の扉、窓、門、飲食物の貯えてあるところにはペンタグラム (Pentagramm) を貼ったり、吊したりする。メックレンブルク (Mecklenburg) 地方では大晦日の夜家族全員が慎しみにはいり、家具、日用の器物を閉ざしてしまい、泉や井戸の擬子、錠、ポンプのハンドルを閉めてしまう。鞭をピシピシ鳴らし、射撃をして悪霊を追う。結婚する娘たちのため、また穀物畑に出かけて射撃する。射撃音は穀物の種子をよく目覚せ突らせるからである。果樹園にはいつて射撃をする。不気味な音、騒がしい音は、精霊たちを追い出す。その音や声が大きければ大きいほど豊饒への希望が増すといわれる。この夜家の外で火をよく燃やし、部屋の中でも薪や石炭をさかんに燃やす。その夜に燃えきらずにのこった木株や薪、石炭は翌年 (新年) の火災や不幸を守ってくれるという。

その他この大晦日の十二時に家長が家の四方四隅に柱を打ち込むと火事からまぬかれるといい、新年になってはじめて出逢った女性から「新年おめでとう」(Guete Neue Jahr) といわれたら、その年はあまりよい年にはならない。そのために反対にまず男性の側、とくに家長から「新年おめでとう」をいわなければならないというしきたりもある。

農耕生活者にとって、畑地に穴をあけるモグラはノネズミなどとともに有害な存在である。ヨーロッパでも「モグラ打ち」(モグラ追い、Maulwurf) がおこなわれるのは、ファスナハトの火曜日、三月の最初の金曜日、グリーンドンネルスターク、カールフライタークなど特定の日とさまっている。動物たちがそろそろ目覚めようとする頃であるが、まだ雪深い大晦日の夜、新年の夜に予祝としてカラサオや棒をもって畑や地面を叩く。中世フランスでは棒に藁を巻きつけて火をつけて庭園の中を歌って歩く。あるいはたいまつや石炭をもぐらの盛上げた土に置いたりする。とくに興味深いのは、太陽が沈むと庭においてゆきモグラの土を一握り持って庭を歩いてつぎのように歌

う。

もぐらどの、わたしの庭を避けて下さりませ山の向うにいつてくだされ、

川や水をたくさん泳いでゆき、

樹木のほとりで肥えふとって下さりませ、おまえさまにもきつといふことがありますぞ。⁽⁸⁾

まだ季節としては耕作にはほど遠いけれど、モグラやねずみが目を覚さぬ前に先手を打って制圧しようというのである。この他、鳥追いに似た行事とか、蟲追いなどもおこなわれる。それについては改めてふれる。

十一 パウロ回心の日

キリスト教徒を迫害していたパウロは、ダマスコスの途上、復活のキリストから「パウロよ、なんぢはなにゆえわれに敵対し迫害するか」と語りかけられ、これによってパウロは徹底的な回心を遂げる。この回心を記念してカトリックにおいては、一月二十五日を「パウロ回心の日」(Pauli Bekehrung)として祝う。冬を短かい単位で測れば、十二月二十五日から数えて一カ月、一月二十五日で冬の前半を終え、あと後半は二月二十五日「ペテロの日」で春を迎える。長い単位で見ると十一月二十五日聖アンドレアス祭から二カ月目、「パウロ回心の日」から二カ月過ぎて三月二十五日「マリアの受胎告知の日」をもって春となる。いずれにしても冬の真中に「パウロ回心の日」を据え、冬を前半後半に分割したことは、心理的に見て興味ある処理の仕方といえる。人々は長い寒く暗い冬に倦き飽きしている。成可く冬を早く終らせ、春の遠くないことを報せる必要がある。まだ寒さは厳しいが、もう眼に

見えぬところで春は準備され、少しづつ動いていることを精神的に確信させなければならぬ。つぎのような諺が民間に語られている。

パウロの回心で冬の半分が過ぎ去り、もうあと半分だけがこのころ。⁹⁾
 パウロの回心で

大地の中で根は向き直る。¹⁰⁾

天候がどんなであつても、この日が来ると冬眠していた昆虫たちも今まで地中に身体を向けていたのを地上に向きを変えるといい、植物も根の向きをかえて活動の準備に取りかかる。この日に若者や娘たちは罪のない占いをやってみる。後ろ向きにして歩いてきてベットに仰向けに寝ころがり、また寝返り（向きを変えて）そのままの姿勢で祈っていると、未来のことが見えてくるとか、未来の花むこ、花嫁が見えてくるともいう。また鳥の結婚式の季節といつて、子供たちは母親からパンやミルクをもらい、皿に入れて窓のところに置いて鳥たちに与える。かつてはカラス、スズメ、その他ヨーロッパにとどまって冬を過す四十雀、アムゼルなどの挙作動作で占いをしたが、このパウロの回心の恵みと喜びを鳥たちにも頒ち合おうというのがこういった習俗となつたものと思われる。

十二 二月とその習俗

二月 (Februar) は元来ラテン語で「潔めの月」の意味で、一年の最後の月、大掃除の月ということになり、今日の十二月にあてはまる。古代ローマの暦は十月月で成り立ち、二月は存在しなかった。その後ヌマ・ポンピリウ

ヌ (Numa Pompilius) は一年を十二カ月に分割したので、最後の月を「潔めの月」と呼んで新しい年を迎える準備期間としたのである。ドイツでは一月を「大きな角」と呼ぶのにたいし、二月を「小さな角」(Hornung)と呼んだ。冬は激しい風が吹きまくる。この時期を表わすのに角笛型あるいは三日月型のパンを作って祭壇に供えた。オーバーオーストリア地方ではヘルンドル (Hernd) と叫ぶ。Hornlein の訛りであろう。吼え立て吹き荒れる風や嵐の風土を背景に二月を擬人化したもので、この月には角笛型の酒杯で酒を飲む季節なので「角笛の日々」(Hornage) ともいう説もある。他方、ユブレンツ附近では二月を「シュペルケル」(Spökel) と呼んでいる。他にシュポルケル (Sporkel) 、スパルケリッッシュ (Sparkelersch) もあり、いずれも同じである。原語の「シュピルケル」(Spirkel) は天地を産む女性神「シュブルケ」(Spurke) に由来する言葉で英語の「スパーク」(Spark, 火花、閃光) と同根である。漸く萌え出ようとする春にたいし、まず火を焚いて潔め、焚き火をあちこちに撒き散らし、豊饒を願うのでこのような方が生れたと推定される。

二月になるとともに太陽は魚座に入る。ゲルマン人も多くの他の民族と同じように、この月に悪魔祓いをおこなう(祓いはこの月だけでなく、秋の終り冬の始めから冬至の前後にかけてさかんである。こうした行為が原始信仰の特質でもある)。とくに二月は荒れ狂う冬を終らせ、冬と夏の争いでも夏に勝ちをあげさせなければならぬ、最高潮はファスナハトであるが、そこに至るまでには「レターレ」(Latäre) の祭、その他数々の祭や行事がある。その序曲が二月に始まるのである。二月の重要な祭は潔めの祭と死者の霊の祭の二つである。すでにのべた二月の語義はさらに古代ローマにおいて動物の犠牲を神に捧げて罪を潔めることから生じた「フェブラチオ」(febratio) に由来する。四九四年司教ゲラシウス (Gelasius) はこのローマの祭をキリスト教のマリアの潔めの祭 (Reinigung) 、すなわち今日行われているマリアの「光のミサ」(Lichtmesse) に変容させた。オーバーバイエルン地方ではこの

リヒトメッセの夕方には、洗礼をうけず死んだ子供や煉獄にいる気の毒な霊のために小さな臘燭をささげる。二月の懺悔日はこの「マリアの光のミサ」と「ペトリシュートル」(二月二日)、「マイティアス」(Matthias)の二月二十四日である。

十三 マリアの光のミサ

「マリアの光のミサ」(Marien Lichtmesse)は「聖燭節」ともいい、二月二日におこなわれる。この祭は現在子供たちが主役になっていて、冬の間燃やした古い臘燭を教会へ持ってゆく行事である。しかし昔はやはり大人たちのお務めだった。二月はじめはまだ雪深いので、子供たちは長靴を履き、厚い帽子をかぶり、近所の子供と語りながら家庭祭壇に点していた古い臘燭を教会へ持参して奉納する。教会ではこの光のミサの日に祭壇の古い火をすべて消し、燧石で新しい火をおこしてこれを新しい臘燭にともす。これが新しい年の春の生命をもった光であり、「光の潔めのミサ」である。いつもほの暗い教会やカペレルもこの日に限って祭壇を中心に万花が咲いたごとく到るところに臘燭を点すのでまさに光の海のようになる。子供や信者たちは教会の新しく切り出された火を臘燭に移してもらい、行列をつくってそれぞれの家へ帰る。その間聖母の讃歌を歌う。雪のちらつく路上臘燭の焰がゆらめき、消えかかるのを気遣いながら帰ってゆく子供たちの姿は一つの風物詩でもある。家に帰れば教会から点してきた火を火種として祭壇はもとより、台所、各部屋ごとにできるだけ沢山の臘燭を点し、春の訪れとマリアの祝福を願うのである。この明るい光のミサは、クリスマスと異なる別の趣きがあるといえよう。この臘燭の火を手づくりのパンの上へ三滴したたらせて祝福し、子供をはじめ、家族が食べる。ときには家畜小屋にも新しい火を点し、牛や馬、羊などにも臘涙のしたたるパンをお握分けするところもある。この新しい臘燭の光は病氣や災い、と

くに雷や雹を除ける力があるといい慣わしている。赤い臘燭の臘涙で十字架をつくり、鍬、鋤、鎌、カラスキ、石臼、帽子、日用の道具や用具にまで滴らせ、マリアの祝福を祈る。すでにふれたようにオーバーバイエルン地方では洗礼を受けずに世を去った不幸な子供や煉獄の苦しみを受けている不幸な魂のために臘燭を三本点し、テーブルと聖水盤の上に置いて祝福と救いを願うところもある。この「マリアの光のミサ」の頃は、丁度大陰暦で数えると新年元日にあたるのである。

十四 聖アガタの日

「マリアの光のミサ」によって冬の間使った臘燭の火を消し、新しい春の火を教会から点してくるように、二月五日の聖アガタ (St. Agatha) の日には村の農婦たちは自分で焼いたパンを教会へ持ってゆき、潔めてもらう。聖アガタ崇拜はシュワーベン、アレマン地方がさかんである。彼女への捧げ物は主にパンと臘燭であり、夕方村人たちはこれらを物語者のために祭壇に供える。このとき火の点っている臘燭が倒れたりすると不幸があり、立てた人が最先きに死ぬとって忌まれる。教会の中庭で燃やした薪の灰は家畜小屋や穀倉に運び、飼料と混ぜ合せるの家畜が病氣しないといい、畑にも撒いたりする。臘の雫を十字型に羊飼のズボンにたらすと無病息災という。ウェストファールン地方ではこの聖女の日にか畜小屋まで臘燭をとます。そうした行為だけでも春の近きを感じさせる。この二月五日の前の晩、聖職者は依頼を受けたパン屋のパン焼かまどなどを潔めに赴く。あるいは当日教会で焼いたパン、村人が残したパンなどを潔める。この潔められたパンを家毎に食べ、家畜にも少しづつ混ぜて食べさせる。このアガタの日のパンを故郷を去って遠くで勉強したり、勤めている息子のもとへ伝(つて)を求めて母親は届けしてもらう。「故郷からのパン」は少年や若者を郷愁や悪霊、病氣から守ってくれると信ぜられている。このアガタ

のパンには「電光、雹、火事よりわれらを守り給え、おお聖なるアガタよ」¹⁰¹ という言葉を書きそえる。

聖アガタは「カタニア (Catania) のアガタ」といわれているように、二五一年頃シチリアのカタニアの町で殉教を遂げた聖女である。その名前がギリシヤ語に由来する「善きもの」、「柔和なるもの」を意味し、エトナ火山が爆発したとき彼女に祈ったところ熔岩の流れの方向が変わってカタニアの町は救われた。一六七四年の爆発のときもアガタは熔岩流を防いだ。その他いく度も町を火災、地震、ペスト、饑饉から救ったといわれる。したがってアガタはまづ火災の守護聖者、とくに鍛鉄工場、ガラス工場、パン焼かまどを持つパン屋などでは、「火の娘」(Feuer-masch) として崇拜している。「聖アガタの護符」は火災を防ぐものとして家の門や工場に貼られ、アガタの聖女の絵が教会や家の中に飾られている場合が多い。人間が不幸や苦悩の妒の中で苦しみ悩むとき、これを守るのが聖女の救いのパンとされる。南欧の女神的性格の聖女がどのような経路をとってドイツへはいり、新しい意味と習俗を見出していったか多くの問題を提起するものである。

十五 ペテロの日とコウノトリの日

「ペテロの日」すなわち「ペトリ・シュートルファイヤー」(Petri Stuhlfeier) は現在二月二十二日におこなわれている祭であるが、旧来の一月十八日でもよいとされ、いずれでも祝ってよいということが認められたのは、一五五八年教皇パウロ六世の布告による。四世紀にはじまった「カテドラ・ペトリ」(Cathedra Petri) の祭は、使徒ペテロが教皇首位権を得て教皇座に着いた祝いの祭である。古代ローマの「カリステア」(Caristia, 死者の祭) の二月二十二日の祭の日にこれを移したといわれている。プロテスタントの間ではペテロとルターが教皇になる試験を受け、まず年上のペテロが合格したのだといっている。民間習俗ではこの二月二十二日を春のはじまりと

見做し、一月二十五日のパウロの回心と対応させている。まだ雪深い村々では死神の冬を藁人形に作って火で焼き、川に運んでいって投げ棄てる、いわゆる死神払いの行事をおこなうところがある。オーバーバイエルン地方やチロール地方では村の若者や子供たちが牛の頸につける鈴を鳴らして春を早く醒させようとする習俗があり、ある地方では鋤や鍬を村人がかっいで村を行列する。エルムラント(Ernland)地方では、このペテロの祭の日に若者が鞭を鳴らしたり、小屋から豚をいっせいに追い出し、追い散らす。豚をもって冬の悪霊に見立てるのである。バーデンではこのペテロの日に泉のまわりを市民や若者が三度廻って歌ったり踊ったりする。この日には凍った泉も目覚めて音を立てて流れ出すという。天気占いもおこなわれ、この日に氷が融けるが、もし融けなければ、あと十四日凍り、さらに四十日寒さが厳しいという。このペテロの日の前に三日晴天がつづく、あとの三日もよい日になるという。この頃になると、日脚も少しづつ延び、夕食の頃に臘燭を点さなくなり、冬の間精を出した糸紡ぎもしなくなる。農家の人々は畑仕事のことを話題にしたり、秋の終りから踏み入れていない葡萄山や葡萄島へ行って葡萄の木や蔓が傷んでいないかどうかを見にゆく。

ウエストファーレン地方では村の大人や子供たちが木槌などを手にして「悪さをする鳥」(Süntevogel Stillvogel) (すべて農作に害をなすもの) を追い出す。森林や植林地に害虫がつくのを防ぐために、このペテロの祭の日に、まだ太陽が昇らぬうちに檜の棒で樹木を一本一本叩きながら唱え言をいう。

貴いお虫様よ、どうぞ出ていって下さりませ、

聖ペテロ様がおいでになりましたでな。^四

オーデヴァルト (Odewald) の子供たちは金ダライや空鐘などを叩き、鉄をかちかち鳴らし家毎に廻って歩く。ペテロの日は春の到来を示すものであり、自然や精霊を呼び醒す行事である。メックレンブルク地方ではこのペテロの日を期して今まで片隅にあった蜜蜂の巣箱の掃除をする。シュタイヤーマルク (Steiermark) 地方の農家では蜂を巢の外に出し、箱を叩いて唱え言をする。

蜜蜂よ、目を覚しなさい、覚しなさい、

聖ペテロ様がお国入りなされますぞ。⁴⁴

このペテロの日は、少年少女の早春の祭でもある。「ペテロの跳躍」(Peterispringen) ともいって、キンツィヒタール地方などは蛙、がま、蛇その他害虫などを追い出す習俗があり、子供たちは鎖や鈴を鳴らして村をとびはねる。とくに家やブルンネンの周囲を三度まわって唱え言をいい、褒美をねだる。ザンクト・ロマン (St. Roman) やオーバーヴォルフアッハ (Oberwolfach) ではつぎのように唱える。

ペテロさま、ペテロさま、

長い虫も嵐と一しよに

ペテロさまの日に吹かれて消えろ

がまも蛇もみな失せろ

出てゆけ出てゆけ、

林檎や梨からとんで出よ、

家の中へ幸福様よ、おいでなされ、

一番高い屋根のてっぺんまでおいでなされノ^四

キンツイヒタールのハスラッハ (Haslach) ではこのペテロの日を「コウノトリの日」(Storchentag)と呼ぶ珍しい行事をおこなう。コウノトリの仮面をかぶったり、あるいは雌雄二匹のコウノトリを帽子の左右につけ、背中に大きな二つのパンの塊りを背負った「コウノトリの小父さん」(Storchevater) がやって来る。この小父さんは車にコウノトリのハリボテを載せてやって来ることもある。まずミューレンカペルレで受胎告知の祈りをしたのちに、子供たちはこのコウノトリの小父さんと一しよに町中をあちこち歩いて歌う。

出てゆけ出てゆけ、

林檎や梨からとんで出よ、

フライブルク近郊のアッテンタール (Attental) ではハンゼラーホフの「蛇のカペルレ」(Schlangenkappelle) で一同お祈りをしたのちに家のまわりを鎖りでつなぎ三度まわって蛇やがまや害虫を寄せつけぬ唱え詞をいう。この日の主役はコウノトリの小父さんで子供たちはあちこちの家へ案内する。コウノトリは、悪い虫、ハエ、蚊、農作物の害虫、ネズミ、モグラ、ヘビ等々を掴えたり追い出してくれるので歓迎される。この小父さんはむろんコウ

ノトリになりかわり、唱え言をして祝福し、春の到来を告げる。各家毎にコウノトリを案内してくれた子供たちに御礼としてお菓子、パン、果物などを与えるわけであるが、コウノトリの小父さんを案内する子供の数は多いので仲々賑やかである。しかしこのような子供の声の中に早くも春の気分が漂う。このような諺がある。

聖ペテロ様が教皇の座にお即きになるとき、

コウノトリも池や沼を探す。⁴⁴

コウノトリは普通シュトルヒ (Storch) というが、低地ドイツ地方では「アデバール」(Adebar)ともいう。これは「幸福をもたらすもの」の意味で、この鳥はヨーロッパにとりわけ親生まれ、愛されてきたのは、雛に示す親鳥の愛情である。コウノトリは自分のやわらかい羽根を抜いて卵からかえったとき雛が巣の中に坐れるようしきつめるといふ。筆者もギリシヤ中部のファルスラという町で民家の赤い屋根にコウノトリが二、三匹の雛とともに巣の中にいるのを見て、撮影しようと近付くと、親鳥二羽は突然嘴を空に向け、調子を合せてカタカタと鳴らす。奇妙な動作を見ているうちに、雛を巣の奥にかくしてしまふのを見た。コウノトリはヨーロッパにおいては春を運んでくる使者として大いに歓迎される神聖なる鳥である。ツバメと同じように人家の屋根、教会や城門の塔などに巣をかけ、卵を産み、雛を育て秋になるとエジプトその他暖かい南国の地に帰ってゆく候鳥である。洋の東西を問わず、天文学的暦よりも具体的な自然暦が一般の庶民の生活に季節を示してくれる。その最たるものが、候鳥であり、魚や動物であり、植物である。コウノトリは不思議に人間と共存してきた鳥で、春を早く告げる鳥として喜ばれる。ただしペテロの祭の二月二十二日に来ることはまづあり得ないので、これは春を待ち望む人間の予祝と

しておこなう行事である。コウノトリは火事や落雷を予知するとか、守護するとかいわれ、コウノトリが巣をつくる家は幸福がもたらされる。ヘッセン州では火事があるとコウノトリが嘴に水を入れて消すといわれており、また巣をかけた家は落雷から守ってくれるといい伝えられている。もし育てている雛を盗んだり殺したりすると、怒って燃える石炭を家に投げつけたり、さまざまな不幸にあわせるという。鳥に神的な霊力を感じていた名残りをこの鳥には多くをとどめており、群をなして飛来してくるありさまは、春の象徴ともいうべきか。とにかくハウフ(W. Haut)の「コウノトリになった王様」の童話をはじめ、ヨーロッパ人の伝説や習俗には欠かせぬ存在となっている。

十六 「フリーリング」考

春は「フリーリング」(Frühling)で現代ドイツ語は表わしているが、古代に溯れば春という季節の呼び名はないし、春という季節を意識していなかった。しかし時代が下るにつれて厳しい冬のと、夏に「先駆ける季節」として春を認めるようになる。この「フリーリング」でさえ、「早く訪れるもの」の直訳であり、この言葉より古い「春」の語は「レンツ」(Lenz, ahd, lenze, ags, lencten)である。レンツとは長い日で、日が長くなる季節の意味である。ゲルマンにおいてはカール大帝の時、「レンツモナート」(Lenzmonate)を用いるようになった。今日でもオーストリア、バイエルン、オーバーヘッセン州では、春を「アウスヴェルツ」(Auswörts)と呼ぶところがある。一種の方言であろうが、「戸外で」の意であり、「外に出て生活する」季節を表わしている。ドイツにおいては今日でも三月中旬頃おこなわれる「レターレ」(Lätare)の日曜日を「夏の始まり」の時期としている。「レターレ」は一応キリスト教曆的に「喜びの主日」と呼んでいるが、習俗的には「死神やびら」(Todaustragen)とい

って死の冬を追い出し、生命の夏を迎える行事である。この場合「夏迎え」(Sommerbringen)と行って、特に「春迎え」といってはいけないところを見ると、冬と夏という二季で把握してきた太古からの習慣を保持している好個の言語用例というべきであろう。シュレンジャ地方では「棕櫚の日曜日」(Palmsonntag)を「夏の日曜日」、「夏の始まりの日曜日」(Sommersonntag)と呼んでゐるやうに、*kyra*に夏である。「夏」(Sommer)はサンスクリットの「サマ」(Sama, 一年の半分の意)と語源を同じくしており、ギリシヤ語の「ホモス」(*hómōs*, 等しい意)または「暑い時期」(*hélos*)ともいう。「フリューリング」は中高ドイツ語、古高ドイツ語にもなく、南欧の「プリマヴェラ」(Primavera)、「プリンタンプ」(Printemps)からドイツ語に造語したもので、「年のはじめ」、「早く来るもの」の意である。本来は春の始まりは一年の始まりと一致していたのである。

ゲルマン神話においては冬と春(夏)の間の争剋は嵐、電光雷鳴の神であるトウール(Thor)と天上の神であり、秩序と平和の神とされるフライの間の闘いと見立てている。フライは「フライヤー」(Freyr)ともいい、女神「フライヤ」(Friga)とも呼ぶ。トウールの神はのちに農耕神の性格をもつようになる。週の曜日に残っている神の名で「ドンネルスターク」(Donnerstag)は「ドナルの神の日」の意味であり、「フライターク」(Freitag)は「フライヤの女神の日」のことである。ちなみに英語にのこっている「ウェンズデー」(Wednesday)はゲルマンの主神「ヴォーダンの日」(Wodansday, Wodanstag)の意味である。春の始まりと年の始まりの一致していた時代は、太陽の大いなる力と生命の輝きの勝利を意味し、その祝いと祭は夏至の日までつづいていた。ところがキリスト教がはいつて来ることによって、謝肉祭(Fasnacht)のような春を迎える祭と復活祭(Ostern)のようなキリストの復活を祝う祭とに分裂してしまふことになる。一体春はいつから始まるのか、天文学的气象学的に規定する春と農耕牧畜の生活において実感する春、あるいは自然の具体的な告知によるものとさらに人間がかくあつて

欲しい願望の中に考えるものとの多様な食い違いが、春の開始の決定を困難ならしめている。その上冬の開始の場合と同じように地理的状态、気候などの諸条件によっても違ってくるからである。

「マリアの光のミサ」(Maria Lichtmesse)の二月二日をもって春の第一日とするか、二月二十日の「ペテロ祭」(Petri Stuhlfest)とするか、これによっても十八日も開きがあり、プレスラウあたりでの月毎の古曆詩によれば、三月からを春とし、三月二十四日の「聖マティアス祭」(St. Mathias Feier)をもって春の開始と定めているのは、農耕生活に則した農民曆 (Bauernkalender) の智恵である。三月十七日の「聖ゲルトルユード」(St. Gertrud)の祭の日としているところも多く、三月三日の聖クニグンデ (S. Kungunde) の祭と見做すのはベルヴァルト地方である。太陽曆の算定では三月二十二日の昼夜平分線の日(春分の日)を春の始まりとしている。三月二十五日は「マリアの受胎告知の祭」(Maria Verkündigung)に当る。自然は年を通じて新しい生命を得て若返えり、世界の創造がいとなまれてゆく。マリアの受胎告知は、世界の救いの始まりであり、新しい年の春の開始でなければならない。そのためにカール大帝のとき三月二十五日をもって春のはじめとしたのである。創世記の「天地創造」で神は混沌を光と闇に分けた。これは昼と夜(光と闇)が等分に分かれた起源を示す。これをもってすれば、天文学的春の始点と宗教的な出発点はほぼ接近するところとなる。つぎのような自然曆の謬がよくあてはまるといえる。

マリアの受胎告知には

ツバメが再び帰って来る。⁵⁰

さきにあげたコウノトリと同じようにツバメも春告げ鳥の候鳥であり、あとにつづく蝶、カブトムシ、カッコウなども春になったことのしるしである。ウエストファーレン州ではカッコウ (Kuckuck) の鳴き声をその土地ではじめてきた日をもって春の始めとする習俗がある。カッコウの声をはじめて聞いた者は、村長や長老に報せると褒美として卵をもらうことができた。十七世紀頃までは村の紡ぎ娘が森の中に春の使者である「カブトムシ」 (Maikater) を迎えるに出掛け、見付けて帰ってくると皆で春の祝いをした。十八世紀になってもドイツの都市ではどこの教会や塔の上にコウノトリが巢をかけたかを市長に報せなければならず、その吉報によって地下貯蔵のワインを取り出して市民は祝杯をあげた。この場合コウノトリが春の開始の目標となっている。早く花をつけたり萌えでるスミレやルリチサ、ハナハッカなどが喜ばれる。村のどこかにスミレが咲いていると告げると、村中の人々 (とくに若者や娘) が集って摘みとって春棒や白樺の若枝に結びつけこれを手に持ち、あるいは地中に突き立ててそのまわりに輪になって歌ったり、踊ったりして春の訪れを喜ぶのである。スミレのほかに、クロッカス、タンポポ、フキタンポポも野山を彩る。雪深い北国では一層春の訪れが待ちこがれる。しかし一旦春が訪れだすと今度は激しい勢いで花は一せいに咲く。ウィルトアネモネ、ヴィントレースヘン (Windroschen)、水仙、スノードロップ、キンポウゲ等々も咲き出し、花の明るさで地上は輝きを増すのである。

十七 三月

ローマの古い暦では、軍神マルス (Mars) に基づいて「一年の最初の月を「マルチウス」 (Martius) と名付けている。これはいうまでもなく「マルスの月」の意味である。カール大帝の時代のドイツ語ではこの月を「レンツモナート」 (Lenzmonat)、「日が長くなる月」 (厳密には Lenzimmonat) と呼んだ。いうまでもなく「春の月」の意

味である。ところがこの呼び名とならんで、他の月名と同じようにローマ風のマルスが訛って「メールツ」(Martz) が用いられるようになる。しかしドイツの各地方にはもつと実際のな呼び名がある。テーゲルンゼー(Teegersee) 地方では「イエルスト・アッカーモナート」(Erst Ackernonat) という。「最初の農耕の月」である。北海の西フリースラント諸島では「フォルイエールスモアンネ」(Forjersmoanne) ずなわち「年の初めの月」という呼び方がある。古代ローマでは三月一日が新年正月元旦でこの日から新しい一カ年が始まる。これは古代ベルシヤの暦の第一月とも対応し、スラブやその他の諸民族にも類似するものが多い。厳密には現在の暦で三月(マルスの月)と呼んでいるものが、じつは昔の正月で春の始まりなのである。

古代ローマの新年正月(マルスの月)には神殿で新たに切り火によっておこされた火をもらって家のかまどに春火として焚く。新たに焼いたパン、「マルスの月のパン」(Panis Martis)を頒ち合い、家族は食事をともにする。この風習と名称は中部ヨーロッパにも伝わっていて、「マルチパン」(Marzipan)という。新年に親族知人の間で贈答をしたり、互いに祝福し合い、一年の幸福を願うことはローマも他の民族も同じである。新しく若々しい年神(Salier)を迎えて市民たちは行列を行って祝い、力の衰えた古い年神「マムリウス」(Mamurius)、「ヴェトリウス」(Veturius)を鞭で叩いて追い立てる行事がある。ユリウス・カエサルがポンペウスに刺殺されたのは、三月十五日(古代ローマ暦の満月の日)であったという。この満月の日には「アンナ・ペレンナ」(Anna Perenna)の祭の日であり、上部イタリヤ、南チロール、フランス、スペインなどは「年老いた年」(brusar la vecchia)を燃してしまふ慣習があった。ローマ、ゲルマンその他の民族も三月から新しい春を迎えるので、すでに今までに幾度もふれたように、三月も悪魔、魔女、害をなす精霊や病気害虫害獣、災いなどを追い出さなければならぬ。新しい春とともにこれらが発生するからである。古代ローマもデーモンを象る人形を石打ちの刑に処したりする祭が

ある。さらに人間や家畜などを鞭で叩いたりして、呪術によって生命を更新し健康を取り戻し、豊饒、繁殖を願う行事がある。アルバニヤの古い習俗にはミズキの枝で人間や家畜を叩いて丈夫にしようとするものがある。ドイツでは日程が多少あとになるが、聖ゲオルクの日にか畜小屋から家畜を出して牧草地に放牧するとき、白樺の鞭で叩いて祝福を与える習俗が残っている。古代ローマにおいても三月一日に神殿の聖火を消し、新しい火をおこすのは、キリスト教の中に摂取しているが、とくに一〇九〇年三月に法的に定まった「春の火」(Frühlingsfeuern)「復活祭の火」(Osterfeuern)「夏至の火」(Sonnwendefeuern)などは、教会や広場でさかんに焚いて火の力を祭るのは、太陽の光と熱、火の魔力についての原始から持つ神秘なるものへの憧憬を表わすものである。

十八 ツバメの習俗

中部ヨーロッパ、とくにドイツにおいては、ツバメ(Schwalbe)はコウノトリとならんで春を告げ幸福をもたらす鳥として喜ばれる。ツバメはその他の名に「壁を飛ぶもの」(Mauersegler)、「アルプスを飛ぶもの」(Alpensegler)などがある。よくイタリアのルネサンスの聖母画像にはツバメの聖母子像が描かれている。幼児イエスがツバメを手にしているとか、マリアの肩にとまっていたかといった画題である。これは勝手に画家が思い付きで描いているのではなく、民間習俗に基くものである。ツバメは「聖母の鳥」(Muttergottesvögelin)と呼ばれている。それはマリアの受胎告知の祭(三月二十五日)の頃、南の方から渡って来て、マリアの誕生の日(十一月八日)頃また帰ってゆくからである。ギリシヤ、ローマ人もツバメが来るのを春の到来として祝った。ロードス島ではツバメが飛んでくると、少年たちはツバメを捕え、両手にツバメをつかんだまま春が来たといって歌いながら行列行進をして島を巡り、そのあとで放してやる。ギリシヤのマケドニヤ方面では現在もおこなわれているとい

はフランケン州や東部ドイツで盛んのものである。すでにふれてきたごとくヨーロッパ中部、北部は緯度も高く冬の到来は早く、スイス、チロールなどの山地は格別として、十一月初旬には雪がちらつき、霜や氷が降り、十一月下旬から十二月初旬には完全に冬の雪と氷におおわれる。雪の晴れ間は二月下旬には多くなり、三月にはわか雪はあるが、雪解けとなり、草が萌え木の芽が芽ぶいてくる。しかし春が確実に来たという感じは、復活祭を待たなければならぬ。冬が大体五カ月から六カ月支配する風土である。暗く寒い冬を嫌い、暖かい春や夏を求めるのは、人間の自然な感情である。まして現実としては五カ月以上に及ぶ冬を早く終らせ、春(夏)を迎えたい願望は、とくに冬の半ばから春までに多くの祭や行事が集中したのであらうと思われる。その中でもとくにこの「レターレ」の祭はゲルマン人の自然にたいする態度を端的に示しているといえよう。

「死神やらぶ」(Todastragen)と「夏迎え」(Sommererbringen)の行事は、かならずしも一つに結び付いているものではなく、別個のものであったらしいが、現在同時に行うようである。ランゲンドルフ(Rangendorf)では藁で男性女性の「おどけ人形」(Popanz)を作って隣の村へ投げ捨ててくる。これによってその年の村人の病氣や災いを追い払ってしまうという行事である。このような祓いが原初的形態であったと考えられる。シュレジャ地方の子供たちは冬を表わす「死神」の人形をかついで、村の家毎に窓からその家の内部をのぞかせる。死神などに家の様子を見られたり、取り憑かれたりされてはたまらないので子供たちに鏢銭やお菓子を与えて退散してもらう。あるいはこの死神をかついで村はずれまでゆく間、チャリンチャリンとたてるクローンタールの鏢銭の音を高く鳴らさせる。死神にその音をきかせて家にとり憑かせないためである。あるいは死神の藁人形を川に投げ棄てる時、村に帰るまではけっしてうしろをふり向かないとか、ぐずぐずして掴まえられないように、出来る限り走って逃げる。バイロイト附近の村では子供たちが豚を小屋から連れ出して教会のまわりを鳴いて走りまわる豚を奇声

をはりあげて追い立てる。この場合は豚を醜悪な冬や死神に見立てて追い出すことを意味している。

この冬の追い出しと一しょに夏迎えの行事が華やかに若者や子供たちによって行われる。長い髻を生やしてやせ衰えた老人の藁人形と若々しい潑刺とした女性の藁人形を車に乗せ、五色の布をまいた春棒 (Frühingsstab) をかざして町や村を練り歩く。このようにして冬を追い出し、夏を迎えようとする。その時の歌に、

ぼくらが死神追い出して、

たのしい春をよび戻す、

ぼくらがこれをやらなけりや、

冬はいつまで居据ろう。⁴⁶

冬と夏の闘いはドイツだけでなく、イタリヤ、スペイン、南ロシア、ユーゴスラビヤと相当広い範囲でおこなわれている行事である。冬の間の生活で溜った塵芥、すべてのものを掃除し、祭壇やかまどに燃やす火も一新し、全く新しい夏型の生活を始めなければならぬ。自然の冬と夏の交代はなかなかからちがあかない。人間がこの冬と夏の闘いに加わってその結着をつけたいと思うのである。子供たちが手にしている夏棒は、夏迎えのために必要な白樺、楡、はしばみなどの若枝を束ねたものを用いる方が古い型であるといえる。中部シュレジャ地方では子供たちは縦の枝に布や色紙などできれいに飾り立て、これを牛小屋、羊小屋などの門や扉に立てかけたり、結え付けたりする。家畜の繁殖を願い、悪魔の災いを防ぎ止めるためであり、復活祭が終るまでずっとそのまましておく。ポヘミヤ地方ではこのレターレを「五月迎え」(Maiengehen)とも呼んでいる。ニーダーコルン(Niederkorn)では「マ

リアの光のミサ」のとき潔めた臘燭の火で、果樹園の樹に臘を垂らして十字架のしるしをつける。レターレの日の祝福はその年の豊作に効果があるからだという。とにかくこのレターレの祭と行事は、「喜べ」という名にふさわしく、親戚知人互いに訪問し合い、プレゼントしたり、御馳走を作ってもてなし、春を迎えた喜びで男たちは酒場やゲステシュタットで若さと健康を祝って祝杯をあげるのである。

中部ヨーロッパにおいては古代四季を知らず、夏冬の二期であったということはすでにのべたごとくである。しかし「春」「秋」二期の存在を考えている南ヨーロッパの習俗や文化を次第にとり入れて現在に至っている。しかし中部、北部ヨーロッパはよく見ると春と夏の区別が東アジア、とくに日本などのようにはっきりしていないし、秋もあるけれど、きわめて短かく、せいぜい一カ月位である。したがって「冬」と「夏」、あるいは年間を「冬型」と「夏型」で考え、規定してゆくという古代ゲルマン的な思考方法は今日でも生活の基本となっているようである。大学の学期の定め方も夏学期(Sommerssemester)、冬学期(Winterssemester)と二期制である。彼等の生活様式も夏型、冬型の交代をおこない、その区切りが聖マルチン祭から聖ペテロ祭あるいは「レターレ」「復活祭」となっている。衣服も夏か冬かであって、日本風の「合い服」(春秋の中間のもの)は少ない。ヨーロッパ思想の根底には自然に順応するよりも、冬を追い出し、夏を迎えとるといふ風に、人間が自然の活動の中に参加して変様させようとする意欲をもっている。二十四節気、七十二候をもち、早春、中春、晩春という風にそれぞれ三カ月を一つの季節としてはっきり生活できる自然の変化に恵まれた日本では、自然への順応、融合同化はあっても、自然との対立による闘争の思考は乏しい。ヘーゲルの体系化した弁証法(Dialektik)のように命題、反命題、綜合命題の対立と止揚の思惟方法はその基礎に彼等の風土と習俗に負うているのではないかとわたしは考えるものであるが、なお後考を俟って結論を出してゆきたい。

二十 ファスナハト

冬から春へさまざまな習俗や祭がつづくが、三月のファスナハト (Fasnacht, Fasnacht) の祭において最高頂に達する。この祭の起源と本質は野性的な道化などがあるにもかかわらず、冬を追い出し、新しい生長力をもつ春をもたらす大切な行事で、ひじょうに古い宗教的観念と祭儀行為にもとづいている。

まずこの祭の習俗の名称と語義から見てゆくと、キリスト教の神学者とドイツ民俗学者、ゲルマニストの間で長い間論議が闘わされ、いまだに結着がつかぬ難問の一つである。ファストナハト (Fastnacht) は懺悔断食にはいる夜というのが直訳であるが、クリスマス Weihnacht というように、聖なる祭にはいるのは夜から始まるのであって、夜の意味はない。だからクリスマスの前夜というときは、Weihnachtsnacht と二つ重ねることになる。このファスナハトはキリストの受難と十字架の死を記念して三十日間肉食を断って精進するので「四旬節」(Quadragesima) ともいう。この「ファスナハト」の民間的にくずれた言葉が「ファスナット」(Fasnacht) であるという。したがって「ファストナハト」(ファスナット) は精進(断食)にはいる前の謝肉祭のことである。これにたいして、民俗学者、ゲルマニストたちは反論する。民間で用いている「ファスナハト」(Fasnacht, Fasnet, Fasend) はけっして「ファストナハト」のくづれた形ではなく、「繁殖する、子を産む、馬鹿げたふるまいをする」「酔っつうかれる」といったような意味を持つ「ファーゼルン」(faseln, faseln) や「ファーゼン」(発情する、繁殖する) に由来する言葉である。アレマン地方とオーバーシュヴァーベンではファスナハトを一般に用い、バイエルン地方では「ファシントク」(Fasching) といひ、ラインラント地方では「カルネヴァル」(Carneval) といひ慣わしている。「ファシントク」は「ファジャンク」(Faschank, Fasel-schank 酒屋を浮れ歩く) から生じた

言葉らしく、カルネヴァルの語源についてはヴェルツブルク大学のヘルマン・ミュラー (Hermann Müller) 教授が一八四四年にラテン語の「カルス・ナヴァリス」(Carrus Navalis, 海の彼方からの宝舟) から導き出さうと試みた。ところがハイデルベルク大学の民俗学者オイゲン・フェールレ (Eugen Fehrelle) は「祭と民間習俗」(Fest und Volksbräuche 1955) の中でこれはラテン語ではなく、「肉よいつまでも健かなれ」(Carne vale, Fleisch lebe wohl) というイタリヤ語に基くものであるという意見を出している。断食、精進にはいるために、しばらく肉から別れるので、機智に富んだ聖職者がユーモア (Spas) を飛ばしたのであるという。もつとも豊饒と幸福をもたらす神々が海を渡って船でやって来るという表象も、春の生長と繁栄の先駆けを示すもので、なかなか捨てがたい。

二十一 ファスナハトの準備段階

十二夜 (燻し夜) が終り、三王礼拝 (Drei Könige) の一月六日になると、ファスナハトで騒ぎ狂ずる「愚者仲間」(Narrenzunft) を組織している人々 (ここではボーデンゼー、リンツガウ、ユイバーリンゲン、マルクトドルフ等々) は、革鞭を鳴らし、ファスナハトがやって来ますぞということを町や村の中にふれ廻る。シュヴァーベンのロットヴァール (Rottweil) やシュラムシルク (Shramberg) では愚者 (ナールン) に扮する衣裳を簞笥から取り出してわざとおごそかに「なんじ愚者の貴き衣裳よ、われに挨拶せられよ、……」などと宣言する。ある村ではこの日はファスナハトの始まりとして云いたい放題のことを仲間にも云っても良しとされ、ロットンブルクではレストランやホテルで魔女や道化の仮面をつけたまま客を接待してよいことになっている。

二月二日「マリアの光のミサ」は、来るべき春の天気占いもおこなわれる。ドナウ河畔のブレイリンゲン

(Braulingen) では森の奥にあるドルイードの石から「ウルヘクセ」(Uthexe) を呼び出す。若者たちはここで燧石を打って火を発し、この年はじめて魔女たちが眠りから目醒めることになる。まだ雪が降る寒さであるが、魔女は目に見えることになり、町中を若者が跳びはね、子供たちもヘクセ、ヘクセといって走り廻って騒ぐ。

「汚れの木曜日」(騒ぎの木曜日、Schmutzige Donnerstag) には豚を屠殺してその肉で、御馳走をつくるころがあるのでこのようにいうが、早朝六時頃から若者やナレーンツンフトのメンバーは騒がしく楽器などを奏し、狭い横丁を歌い歩き、うかれたようにリズムをとってゆく、その歌の一部は(D'mullere hetz, se hetz)と歌う。ゼッキンゲンでは五時に起きて楽隊の行進をおこなって、ファスナハトがいよいよ開始したことを町中に告知し、ナーレンバウム(Narrenbaum, 愚者のお柱)とって巨大な樅の木を町の広場に建てる。そして子供たちにソーセージやロールパンのヴェッケン(Wecken)などを配り、まず子供達のファストナハトを祝うのである。家毎に「ファスネットのお菓子」(Fasnet Kuechli)を焼き、子供たちはつぎのような歌を歌う。

ファスナハトは楽しいな、

ママがケクリ(ケーキ)を焼いてくれ、

もしも焼いてくれなけりゃ、

他に楽しみありゃしない。¹⁰⁰

エルツァハ(Elzach)などには今もファスナハトの仮面を作る職人がいる。大きな鼻の曲がった魔王、魔女、熊や狼、猿、鹿などの動物面、死者の仮面、狐やリスの尻尾をぶら下げたハンゼレ(Hansele ハンス小僧)、カタ

ツムリの殻で全身をおおうヒュスリナロ (Schneckenhäuslarro) その他ウサギ、リス、モグラ、ノネズミ、鴉、蛙、ありとあらゆる動物などに化粧した男たちがグループを作って町を飛んだり跳ねたり、大声を発し、奇妙な「猫の鳴き声」(Katzenmusik)をあげ、さまざまな生物の鳴き声を出し、アコーディオン、笛、牛の鈴、金ドライ、ブリキ鐘などで奇声をあげる。地域により職業によってさまざまな着想や衣裳をつける。現在ではアフリカ原住民やアメリカ原住民、エスキモーの服装をしたものまで登場する。こうした「馬鹿跳び」(Narren-sprung)と狂騒は日曜日をもって最高潮に達するが、昔ながらのペルヒタ夫人、ホレ婆さんも登場する。ペルヒタ夫人も年老いて衰えた姿と、若々しい娘の姿が仲睦しく行進するが、元来は冬と死のペルヒタと新しい春と生命のペルヒタとの交代を行事化したものであると思われる。

ヴァルトゼー (Waldsee) の町では、町役場の広場で大きなかがり火を焚き、この魔術の火のまわりで魔女の仮面をつけた者が、帚を手にして踊り狂う。オフフェンブルク (Offenburg) ではいくつものかがり火の上を魔女たちが跳躍し、原始的力感にあふれた舞踏が感ぜられる。ヘクセたちが騒がしく躍れば躍るほど豊饒な夏を迎えることができる。むしろこのヘクセは男性が演ずるのであって、ファスナハトの祭に参加する者は男性に限られている。ヘクセたちは屋根やバルコニーにのぼり、そこから林檎や穀物の種子を投げ散らす。樹の上から通る人々にオレンヂやヴルストに投げることもある。これを受け取って食べる者は一年中幸福であるという。ファスナハトの季節には冬の間眠っていたデーモンが動き出す。これを熊手や、古い帚、ニンニクで押えつけようとする。他面これらの力を人間のために有益な味方にしたいと願う。ある村ではファスナハトの終りに「レターレ」と同じように藁人形で作ったヘクセンを燃やしたり、川に流したりして、いよいよ本来のキリスト教の精進期間の「ファスナハト」(Invocabit) にはいるのである。

ゲルマンの民俗信仰によれば、若々しい美しい魔女ベルヒタと老いて醜いベルヒタとの争い、夏(春)と冬、生命と死、光と闇、誕生する者と大地へ帰る者との間の交代の神祕の行事は、三位一体の宗教確信をもつキリスト教によって圧倒され、抹殺されたかに見える。善と悪のデーモンたちといった多神教的自然の精霊信仰は、理性や悟性の神学的内容をもつものから批判を受けてきた。しかし理性で納得しても心情の上では認めがたいものが人間の中に内在している。信仰には民俗的なものがつきまとう。非合理的な情感と行動のただ中で生の真実を体験する。ホーエンツォルレン附近のグロッセルフィンゲン (Grosselfingen) の村では毎年蝶の踊りが村の若者や娘たちによっておこなわれる。この踊りはキリスト教とは何の関係もないゲルマン的な素朴な遺習にすぎないが、村の古老たちはこれが演ぜられないとその年には祝福がないといって嘆く。冬の間荒れ狂う嵐の神ウォーダンの軍勢も次第に衰えを見せ、和やかで力にみちた春と秩序の世界がやって来ると、人間も一しよにかれ歌ったり踊ったりするが、同時に乱暴な者を追い出し、植物や動物の力を手助けして芽を出し、花を咲かせ、実を結ばせようとするのである。詩人ブッセ (H. E. Busse) はゲルマンの行事についてつぎのようについていう。

「年の入口にもっとも暗く長い夜がたたずんでいる。太陽のない幾日かには霧が立ち昇る。ドイツの森にはかつてはデーモン(魔)や不気味な精霊がかくれていた。おそろしい姿、醜いもの、古いウォーダンの死者の国の者たち、ウォーダンの仲間たち (Wutesheeres)」、これらは嵐ときびしい冬の戦いの中で豊饒、光、大地の祝福、人間の魂にたいする敵である。しかし冬至を境にして雞の卵の黄味の目ほどのものが生れ、日は一日一日と鶏の足程にのびてゆき、やがて巨人のような足どりで光は森や畠や田舎にひろがり、人間の力は信仰の防禦によって好ましからざるもの、悪しきもの、暗いもの、魔的なものに対抗するようになる。畏怖をひき起す力に慣れ親しむ武器を手にして、跳躍と仮装によって勝利に勝ち誇りながら力を増してゆく春の光にたいしおそれ憚るデーモンをすべ

て畠地から打ちのめし、追い出すのである。」いかにも詩人らしい直観力によって民間習俗の意味を感取している。西南ドイツ地方で仮面服装の踊りのものとも古い記録は、ボーデン湖中のライヘナウ島の修道院から出た「プリミニ修道院長の布告」(Dicta Abbatris Primini)がある。このプリミニ修道院長は七五三年歿しているが、「二二章からなる条令の中で六条が仮装踊りの古い形態を示している。「月の朔日、祭の日」にまたこの日以外の日であっても、鹿に仮装したり、老女に仮装して徘徊してはならぬ。また男子が女子に、女子が男子の服装してはならぬ。」のちには野性人、山男、山姥などファスナハトの類型となる。老女はヘクセとしてあらわれる。ファスナハトの以外の祭、たとえば十一月十一日の聖マルチン祭、聖霊降臨祭にも仮面、仮装の習俗があったらしい。教会の雨水の落ち口、橋ケタ、椅子などに奇怪な顔をしたデーモンや精霊などの像はキリスト教以前の祭儀形態のパロディとされている。ファスナハトは何度も禁止令が出ているが、仲々中止されなかった。その最高の頂点は有名なニュルンベルクのハンス・ローゼンブリュット(Hans Rosenplüt)やハンス・ザックス(Hans Sachs)のマイスタージンガーなどであろう。市民や農民の仮面の踊りが、宮廷での仮面舞踊会に取り入れられたりした。

このファスナハトにおける仮面をつけて踊り跳ねる習俗は、日常生活とは全くちがう別の世界へ人々を高揚させる。デーモンやヘクセなどの奇怪なマスクや仮装にかくれて人間を解放する。愚者たちは全く別の国からやって来て、この世界がどんな状態なのかありのままを見る役割を果す。「愚者は真実を語る」という諺があるが、古い夏と冬の争いの行事からまず始まり、愚者たちが暴れたり騒いだり踊ったりしながら、政治や社会の諷刺なども行いやがてパロディへと発展した。愚者の裁判はそのことを意味し、一種の無礼講でもあった。心理学者シュミューダー(Friedrich Schmeider)はファスナハトのような馬鹿騒ぎは「精神衛生上の必要性」(Psychohygieneische Notwendigkeit)であるといっており、カトリック教会もこの祭にたいして静かに沈黙していることの意味を考え

るべきであろう。

ファスナハトが終ったあとの日曜日に「古いファスネット」(Dalt Fasnet) と呼ぶ古い形の祭をおこなっているところがある。これは全く地方の郷土的な祭でレターレとも結びついている異教的なものやキリスト教の結びついた早春の行事である。「火の日曜日」(Funkensonntag) といつて車輪に藁をまきつけ、これに火をつけて島や谷地を転がし、春を呼び戻し、太陽の光を明るく照らさせ、新しい年の大地に祝福を与えようとする行事である。エルツタールの若者たちは森に薪を取りにゆき、小学生位の子供は村の家毎たづねて柴の束と麦藁をもらう。教会の塔で日曜の晩鐘が鳴ると、若者たちは柴やまきを使って輪型を作り、ころがして山の上に運び、天使の告知の言葉や歌を唱えたり、また昔からのつぎのような唱え詞を唱えながら火をつけた輪型を谷に向って転がし落してゆく。沢山の輪が燃えながらころがり、枯草や落葉も燃え、輪と輪がぶつかり合い、若者と子供たちはつぎのように叫ぶ。

火の輪よ、火の輪よどこへゆく、

誰さんへゆくはずだ、

もしも真直ぐ行かなければ、火の輪の値打ちはありはせぬノ。

一番に司祭、村長、先生のとこに火の輪はたどりつき、やがて家々に到着する。しかしこの行事に心をときめかせて見守っている若い娘のところ、青年たちの火の輪が早くたどりつくのは、当然かもしれない。最後の火の輪が村にたどりつくと、改めて藁をまきつけた車輪(荷馬車など)に火をともしあちこちの畑に走らせ再び行事はにぎやかさを増し、家ごとに灯を明るくともし、ファスナハトのケーキを食べ、ワインを飲んで春を祝う。このよ

うにファスナハトのヘクセンの火の踊りや火の輪ころがしなどは、素材ではあるが農耕の開始に欠かせないゲルマン人の古くからの習俗に根ざしているものなのである。(未完)

- ※ (1) St. Gallen läßt den Schnee fallen.
 (2) Andries bringt d' Winter gewiß.
 (3) Wenn Martini auf seinem Schimmel geritten kommt, so er bringt Schnee.
 (4) Wenn St. Andreas-Abend künnt pflegt jeder, der sich will beweiden, auch die, die sich bennamen will, ein hitziges Gebet zu treiben.
 (5) Meas, deas
 Heiliger Sankt Andreas,
 Laß mir erscheinen
 Den Herzallerliebsten meinen
 In meiner Gewalt,
 In meiner Gestalt,
 Wie er geht,
 Wie er streht,
 Wie er mir vor den Altar geht.
 Laß ihn erscheinen bei Bier und Wein,
 Soll ich mit ihm glücklich sein.
 Laß ihn erscheinen bei Wasser und Brot,
 Soll ich mit ihm leiden Nöt. (Rottenbach, Würzburg im Jahreslauf).
 (6) Dezember kalt mit Schnee.
 Gibt Korn auf jeder Höh.
 (7) Gibt's im Januar viel Stern, Leben die Hühnen gern. (Waldfeier).

- (8) Moll, du sollst meinen Garten meiden,
 Und in alle Berge scheiden.
 Und in alle(n)Wasser(n)baden,
 Und an alle(n)Bäume(n)bladen,
 Dann sollst du sein in Gnaden.
- (9) Pauli Bekehr halb hin halb her.
- (10) Pauli Bekehr dreht sich die Würzel um in der Erde.
- (11) Von Blitz, Hagel und Feuergefahr, bewahr uns, O heilige Agatha!
- (12) Sunteworm wut du herut,
 Sunte Peter ist kommen.
- (13) Bienl, auf, auf,
 St. Peter ist im Land.
- (14) Peter, Peter, Sturm
 Mit dem langen Wurm!
 Peterstag ist bald vergangen,
 verrecken alle Krotten und Schlangen.
 He-rus-he-rus
 Äpfel un Bire zum Lad rus!
 Glück ins Haus, Glück ins Haus, bis zum oberste Dachfirst rus!
- (15) Wenn St. Peter geht zu Stuhl
 Sucht der Storch nach dem pflu.
- (16) Auf Maria Verkündigung
 Kommen die Schwalben wiederum.
- (17) Wenn ich fortzieh', wenn ich fortzieh', ist Kist und Kaste voll, ist Kist und Kaste voll,

- Wann ich wiederkomm', wann ich wieder komm', Ist alles geleert.
- (18) Nun han den Tod wir ausgetrieben, Und bringen den lieben Sommer wieder, hätten wir den Tod nicht
ausgetrieben, so wär er dies Jahr wohl hinne bleiben.
- (19) Luschtig isch die Fasenacht,
Wenn mei Mueder Küechnli bacht.
Wenn sie aber kaini bacht,
isch kai luschtigi Fasenacht.
- (20) Dicta abbatis Pirmini Kap. 22, 6 Ab. Geht nicht am Monatsersten oder zu irgend einer anderen Zeit als
Hirsche oder als alte Weiber verkleidet umher! Ihr männer sollt keine Frauenkleider tihre Frauen keine
Männerkleidung anlegen, sei es am Monatsersten selbst oder bei anderen lustigen Begehungen, die sehr
zahlreich sind.
- (21) Schibe, Schibe, wenn soll die Schibe goh!
Die Schibe soll dem *N. N.* goh.
Goht sie nit, so gilt sie nit!

参 考 文 献

Die Legenda Aurea des Jacobus de Voragine, Übers. Benz. H. Hümmeler, Helden und Heilige. Lüpke; Ostfriesische
Volkskunde. H. Lehmann, Volksbrauch im Jahreslauf. K. Brunner, Ostdeutsche Volkskunde. Reinhardt, Brauchtum
im Schwarzwald. J. Kersch, Volkstum und Volksleben in Köln. K. Welker; Heilige, geschichte. Legende. Kult
G. Kapfhammer; Brauchtum in den Alpenländern. H. R. Schindler; Aberglauben des Mittelalters. K. Meisen;
Rheinisches Jahrbuch für Volkskunde.